

幻想郷でまったり生き
ていきたい

よろよろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故によって命を落とした、ちよつと変わった青年 “山神 冬華” が様々な出会いを繰り返しまつたり？と幻想郷で生きていくそんなお話

目次

ここは？	1
こんには幻想郷	20
かわいい人形と美味しい紅茶	35
泥棒？巫女？いや、魔法使いだ!!	51
人里にLET'S GO!!	68
紅霧で危機一髪か!?	77
能力開花の時間だー	144
宴会にご招待	157
いま、あなたのうしろに…	189

「は？」

「うーん…うにゆく…んあ？」

「あれれ？俺のベッドは？」

「寝て起きたら外？しかも、見たことない場所だ

夢と言うには中々に鮮明で現実のような感覚

「でもそんなに悪くないな（こゝ）」

日本では見たことないような幅の広い川

一面に広がる彼岸花畑、日の出のようで夕暮れのようにでもある

空の明るさ、どれも幻想的で現実的では無い知らない場所

だがその世界はとて

「綺麗だな…」

「さて、これからどうしようか」

景色に魅入るのはここまでにして、この場所の地理は全く分からない

日本にこんな場所なかったはずだ… 多分

「とりあえず移動してから場所の把握を… ん？」

人？いや人っぽい何か？そんな気配がするぞ

何それ怖すぎいゝ

「あの岩の後ろか」

多少怖くはあるが好奇心には勝てん！！

ゆつくり近づいて確認だけだ確認だけ

「そー… あれ？」

いない？そんなわけが、確かに気配があつたはず

“ 生きている” ものの気配が

「おかしいなあゝ」

「何がだい？」

「誰か？いると思つたんですよね… え？」

後ろにえ？後ろ！？いつの間に？

落ち着け落ち着け、冷静さを忘れるな

「すみません邪魔をしてみましたようで」

「いやいいさ、休憩時間でお昼寝タイムだったただけだからさ」

「そうなんですか」

休憩つてことはこの辺りで何か仕事でもしてるのか

「アタイは小野塚小町つて言うんだあんたは？」

「山神 冬華つて言います、出来れば名前で読んでいただけるとありがたいです」

「そうかい、わかつたよアタイも小町でいいよ」

「わかりました小町さん」

良かった、久しぶりの優しい人だ

「ところで、ここつて何処なんですか？俺は見たことないんですよねここ日本国内ですか？」

日本だったら定期的に寄りたいから場所を知つておきたいし

「日本？聞いたことないね」

「え、そうなんですか」

「そんな場所初めて聞いたよ」

日本を知らない？海外つて感じでもないそれなら

「(ハハ)つて」

「……ここはね、死者の魂を運ぶ場所“三途の川”そしてアタイがその魂を船で運ぶ水先案内人、言つちまえば死神かな」

三途の川：： 魂を運ぶ、だからここの空気はこんなにも淀みが少ないのか
待てよなら今の俺って

「死んでるか、死ぬ1歩手前ってことなのか：：」

「そんな感じだね、でも不思議だねあんたは確かに死んでるって感じだけど自我を保つてるし」

「それはどういう：： 魂だけだからか」

「そういうことさ」

でもそれなら俺死んでないんじゃない？これから死ぬのか？

俺が役立たずでそれで神様がついに俺を見放したのか？

「これから俺って、罪をはかりに行くとかそんな感じですかね」

「あんた物分りがいいね、賢い賢い」

「あは、あはは」

これから審判をうけるのか、俺地獄に落ちんじゃない？

「：：： 二度と離れないように誓うよ愛の運命♪」

「おお：： 中々いい声してんねなんの曲かは知らないけど」

「よく1人で歌ってるんでね：： おお？」

ものすごい大きなそして威圧感はまだ違う圧を放っている建物が見えてきた
「そろそろだね」

「あそこか」

いやあー、緊張するなく地獄の線が濃厚だけど

手違いで地獄行きを回避出来ないかな

「はあ」

「気楽に行きなつ…なんて言うようなことではないね」

「ですね」

「まあ話してる感じ悪い奴って感じでもないし、

今までどんな行いしてきた変わらないけどね」

「最後の神頼みでもしておきます」

「そうかい」クスクス

地獄に行きたくねえーよー

「四季様ー!!」

「あら小町、今は休憩の…小町その方は？」

「やっぱり四季様もおかしいと思えますよね」

「はい、魂であるのは間違いありません、

ですが実体を持ち更に生を感じる…初めてです」

俺は例外も例外らしい、今の会話を聞いた感じ

死の気配と生の気配をどちらとも感じるらしい

どういう事だ？結局俺は死んだのか死んでないのか

「あの、俺はこれからどうなるんですか？」

「そうですね、前例のない事態ではありますが

私は運命に対し白黒はつきりつけることが役目

あなたがこの場にいるならばあなたの罪をはかります」

そう言つて四季さんが取り出したのは

「浄玻璃鏡か…」

亡者の生前を見て罪の重さをはかる為に必要な鏡

なんと言うか自分の生前を目の前で見られるつて

めっちゃ恥ずい…

「ご存知でしたか、今からこの鏡であなたの生前を見て

今までの行いが善か悪か見定めさせてもらいます」

「あの…」

「何か？」

「この審判？判決？が終わったあとは自我の無い魂になるのでしょうか？」

それじゃないと地獄だったとき…想像したくない

「いえ、自我はその時に戻ります戻らないと

地獄での罰をやる意味がないですから」

「ですよね」

詰んだなこれ

「何か心当たりが？」

「迷惑かけて生きてきたようなもんなんで凄く」

「…まあとにかく始めましょう」

side 映姫

山神 冬香…この場所自我を持ち生者か亡者か判断が

正しく出来ない例外中の例外

「(何より魂から漏れる善意が凄まじい)」

浄玻璃鏡を見なくとも判断しても問題ないくら

善と優しさに溢れている…

「そんな彼が地獄に落ちるだろうと思っていると
言うほどの迷惑とは」

そんな些細？な疑問を抱きながらも鏡を覗く

「（…ツ!?!）」

………

「あなた… 男の子ですって…」

「そうか… 失敗だな」

………

「冬華、お前は男に生まれてしまった」

「それってわるいこと…なの？」

「ああ、お前は生まれてきたこと自体が悪だ迷惑だ」

「だからお前は家の為だけに働いてもらう、いいな」

「そしたらおとうさんはぼくをみとめてくれるの？」

「… ああ」

「わかりましたぼくがんばります」

………

「あなた!! 女の子だそうよ!!」

「そうか!? よくやった、これで後継として:..」

「(なんのはなしをしてるんだろう?)」

「冬華お前は今後家の為の勉強はしなくても構わない」

「:.. え、どうして?」

「あなたはねお兄ちゃんになって妹を守るの」

「そう言う事だ、妹が辛い時、危ない時、守るのが

お前の役目だ」

「必要な勉強は自分でやれ、だが妹の事が最優先だ

俺やお母さんが見れない時、お前は自分の事より妹を

先にするわかったな」

「それがただしいこと:.. なんだね?」

「ああ(ええ)」

「わかりましたがんばります」

.....

「おにいちゃん」

「ん、どうした春華?」

「これやつといてよ」

「… 春華、これはお父さんが「うるさい!!」

「いまはおとうさんたちいないでしょ、だったら

おにいちゃんもやってもかわんないじゃん」

「… でも「やらなかつたらおとうさんに

おにいちゃんじゃやましてまともに出来なかつた

ていうからね」… わかつた、やつとくよ」

「さいしよからそうしなさいよねまつたく」

「(はあ、なんで俺が… だけどお父さんに悪い

印象を持たせる訳には、認められないといけないから)」

………

「お前の妹ムカつくんだよ!!」

「家がでかいからって偉そうに!!」

「(春華、何やってんだよあいつ)」

「その分お前は緩いから、いいサンドバッグになるから

鬱憤ばらしに助かってるわー」

「(痛つてえ… お父さんに言っても妹を守れつて

言われるよな… 言われるよなあ〜」

……

「冬華くん、今日もよろしくね♪」

「… わかったよ」

「今日さこれ使おうぜ」

「サバイバルナイフじゃん!! どうしたのそれ」

「親父がキャンプとか好きでよ、ちよつと持ち出して

来たんだよ」

「(こいつ、正気か?)」

「早くやろうぜ!! こいつ殴ってもあんま

痛そうにしねえーから、消化不良だったし」

「おい、流石に「サンドバッグくんはさあ」

「黙って受けてればればいいんだよ」

ザクッ

.....

「はあ... 今日俺ひとりか」

「ん？机の上に... は？」

「一人暮らしの為の、荷造りをしとけだつて？」

「.....」

「俺ついに、見放されんのかな？」

「あは、あはは...」

.....

「お父さん？なんでお兄ちゃんは一人暮らし

になるの？（仕事の押し付け出来なくなんだろうが）」

「あいつに割く金もつたないからな、

認めてもらえるためつて言えばあいつは一人暮らし

でも何でもやるさ」

「ふーん（私の為のお金が増えるならいいか）」

「... しかしどうにかあいつを切り離す事は

出来ないのか」

「…（あいつ、憎たらしくも私よりも、もつと言うなら

お父さんよりも能力が高いからいつその事…）」

「ねえお父さん」

「何だ、春華？」

「私にいい考えがあつてね…」

……

「…まさかあの父さんが俺の為に旅行を

提案してくれるなんて」

「（少しは、認められたってことなのかな？）」

「嬉しいなあ」

「（いきなりの一人暮らしの件で、完全に

見放されちゃったのかと思っただけ）」

「考えすぎだったか」

「（相変わらずの1人ではあるけどね）」

「…アブナイ!! ヨケテ!!」

「なんの…え？」

「（トラックがものすごい速さでこっちに、

流石にサンドバッグな俺でもあの勢いのトラック

死ぬ、避けられるきもしないし…。」

「冗談キツいって」

「(やっと認められて来た所なのに、やっと

父さんに認められてきた… 父さんが

言っただ生まれくるのが悪ってこういう事なのか)」

「俺… 頑張ったんだけどn

ドンッ

………

「(これは、なんと言う…。)」

これが、自信が地獄行きだという人間の

人生なのですか…。

「(善悪の押し付け… おうよそ人が許容できる

範囲をゆうに超えているストレスと暴力の数々」

人間ではない私でも長時間働いたら過労に

やられてしまう、でも彼は10代にも満たない

歳から、普通の人間以上もの時間を仕事そして

家の主に父親の過剰な強制を受け育ってきた

「(それに彼は……それが当たり前だと思っている)」

きつと彼は純粹なんでしょう……人間誰しも欲に生きる

それが本来のあり方と言つてもいい、でも彼は

その欲を押さえ込んでいる周りの環境と思ひ込みで

「(それで……壊れてしまっている)」

他人であるとはいえ他人事では流しきれない

事実によく怒りが込み上げてきた

side out 映姫

side 小町

「……し、四季様？」

四季様が見ていて圧倒されるような怒気を

纏っているのがわかる

「ちよつとあんた、生前に何してたのさ」ヒソヒソ

「わ、分からないですよ、まさかここまで怒るなんて」ヒソヒソ

「あんたのことでしょ？分からないって」ヒソヒソ

「確かに悪い事をしていたかもしれないですが、

ものを盗むとか暴力を奮ったとかないですし

悪口だつて言ったことないですよ俺」ヒソヒソ

悪口もないのかい!?それならなんで四季様は

「・・・冬華さん」

「・・・なんででしょうか？」

「あなたは親に主に父親に対してどう思われていますか」

「かなり厳しいですけど、自分の事をしつかり

見てくれていると思います」

んー、話が見えてこないねえ冬華の父親に対する印象

が重要そうにも思えないけど

「・・・それが、自身の自由を縛ってもですか？」

どういう事だい？自由を縛る？

四季様は一体何を？そんなの普通に拒否するはず…

「それが普通なんじゃないんですか？」

…え？

「し、縛られるのが普通って」

「それが、俺の役目ですから」

…そういう事かい四季様

「胸糞悪いねえ」

「？」

四季様は冬華の生前を見て怒ってるんだろう

四季様がここまで怒りを表に出すってことは

「(見てないアタイでもわかるくらい)」

“地獄”のようなもんなんだろうね

side out 小町

「…それでは冬華さん貴方の『ちよつといいかしら』

んえ？何処から声が？

…てかなんだ“隙間”見たいなのが空間に出来てる

「珍しいですね紫、貴方がここに来るなんて」

その隙間からは綺麗な女の人が出てきた

いやいや理解が追いつかんよ…

「彼に用があつてね… 冬華くん」

ゾクッ

「なんで俺の名前知ってんすか？」

「それはね貴方を見ていたからよ」

俺を見ていた？まさかあの隙間からか

「その隙間のようなものから見てたんすか？」

「あなた冷静なのねもっと焦るわよ普通」

「だいぶ混乱してますけどね」

ほんとよく冷静になれたわ俺

「まあいいわ… ここには提案をしに来たの」

「提案？」

死んだ俺になんの提案だ？

「それって」

「紫あなたは…」

「そう、冬華くんあなた”幻想郷”に来ないかしら」

こんにちは幻想郷

「幻想郷？そこはどんな場所なんですか？」

「そうね、幻想郷には、人間、妖怪、妖精、神……

平たく言えばあなた達で言う“空想の存在”が集う場所」

ほお、中々興味深いなそれに俺達で言う空想って事は

「異世界とは違うんですよね？」

「よくわかったわね、幻想郷はあなたのいた世界と

陸続きになってている世界、認識がされないのは結果に

よって外の世界との干渉を断っているからよ」

でもそれって

「俺がその幻想郷に行くのってイレギュラーなのでは？」

「……本当に鋭いわねあなた、安心してその辺の問題は」

？. . . どういう事なんだ？

「紫、言葉足らずで冬華さんが困惑してますよ」

「あらごめんさいね、なんで大丈夫かって

言うよね：私に幻想郷を作った賢者の一人だからよ」

：ま？世界を作った一人？

「：世界を作ったって凄いなあ」

まさかそんな重要な立ち位置の人だったとは

「それでどうかしら？幻想郷に来る」

「一つだけいいですか？」

「何かしら？」

「幻想郷に行く場合の俺の存在って

元いた世界だと無かったことになるのですか？」

「「!？」」

side 紫

今私は久しく驚愕の感情が出てきている、

その原因は目の前の少年、彼の異常とも言える

思考回路、普通では考えられない状況に対しての

冷静な判断力そして何よりこの短いやり取りの中で

幻想郷入りすることによって発生する外の世界での

記録の消滅まで理解した

「ええ、幻想郷に入ると言う事は空想の存在に

なるようなものだから外の世界で起こったあなたの

記録はなくなってしまうわ」

「・・・ そうなんですか」

「どうかしたのかしら？少し思い詰めた表情してるわよ」

何に悩んでいるのかしら？

「家族に、とくに父さんに忘れられるのは

少しずつ認められてきたかもしれないから・・・」

「そう・・・」

どうしたらいいのかしら、真実を言うべきか

四季映姫も複雑な表情をしてるし・・・

「冬華くん、あなたはどうしたいの？」

情けないけど彼に委ねるしかないわね

「俺は最後にもう一度見て判断したいです

死んでしまった俺をどう思っているのか」

「それで自分で納得して決めたいんです」

「わかったわ、私の隙間から見れるからそれで確認しましょう」
：： 私自身まったく気が進まないけどね

side out 紫

「どうかしましたか？」

紫?さんはどこか乗り気ではないような雰囲気

何より四季さんの何かを言いたげな表情に疑問を持った

「いいえ私は何も言うことは無いわ」

「私は：： いえなんでもありません」

気にはなるけど、探るような感じでもないな

「じゃあ、今から繋げるわね」

「はい」

そう言ってから隙間には俺の家族の会話の様子が

映し出された

『あなた冬華は亡くなったそうよ』

『そうか、上手くいったようだな』

『案外スムーズに事が運んだねお父さん』

『本来なら成功の見込みの低い偽装事故、

まさか俺に認められたかもしれないと

思わせて隙を作ることを思いつくとはな』

『お兄ちゃんはよく、お父さんに認められるためって

口癖みたいに言ってたしね、お父さん慕われてて

よかつたねえ』

『馬鹿を言うな、あんな〴〵化け物〴〵に慕われる

なんて嬉しいわけないだろう』

『まあまあ、それがあつて本来なら無傷の

生還もやりそうなくらい規格外なお兄ちゃんも

簡単に消せたんだし良かったじゃん』

『でも良かったのかしら？あの子は春華が

言うように規格外だし、どの仕事をなげても

全部完璧にこなしてた…もつと使ってからでも

良かったんじゃないの？』

『確かに、使えるだけ使い潰すのもいいだろう

だがあいつのような化け物が本家の連中に

知れ渡りでもしたら、継ぐことの出来ない

有能な男を産んだ無能の家と言われ権限の

剥奪の危険があつたからな、高校に上がる前の

この時期が丁度いいと思つたまでのことだ』

『そういう事ね』

『まあ、最後にあいつには死ぬ前に本家の権力

を覆すレベルの大仕事をさせてあるし、その進展具合は

現段階で世界を相手にやって行ける程と考え

られている程度にはプロジェクトの構成が

規格外らしい、まったくとんだ化け物だな』

『ちやつかりしてるわね（してるね）』

『これからは、あいつも消えより動きやすくなる

最初こそ邪魔だったが最後にいいもの残してくれて

本当に最高の駒だったな』

そう言つて笑っている3人を最後に隙間は閉じた

「……………」

アタイは今言葉が出てこない……出せないと言う方が合ってるかもしれない、アタイが思っていたよりも冬華の家の闇は……いや冬華に対する家族の態度は最悪だった

「(これが同じ人間に、同じ家族にするような

仕打ちなのか!!)」

アタイは心の中で叫んださ、叫ばずにはいられなかつた冬華は話していてわかるほど善人で純粹だそんな

善意の塊のような奴を化け物と揶揄し、能力が優れていて反論もせずこなすからって使い潰す

ような働かせ方をしている、まだ10代の学生に……四季様だって仕事には厳しいミスに対しての

説教は過剰すぎる時もある、でもそこにはアタイの為を思つての行動であるのがわかる

だからアタイもそこに関しての文句はないし

むしろ感謝さえしている

「でもこんなのは」

信頼も何もあつたもんじやない

「冬k… ツ!?!」

今まで見ていなかった冬華の顔は

まるで何もかも見ていないようだった

side out 小町

side 映姫

「……………」

これが今まで自身の家の為に尽くしてきた

青年に対してとる家族の態度ですか…

「……………」メキメキ

持っていた笏が壊れてしまうほどの力握り

青年、山神 冬華に対する仕打ちについて

ぶつけようのない怒りと不快感が湧いてきている

「(こんなことがあつて…)」

いいはずがない、彼は審判の必要ないくらいに善人

天国行きが確立している、家の仕事の半分の負担、

誰もやらない事を率先して行い、重いものを持たない

お年寄りから怪我をして飛べなくなってしまうた小鳥まで

誰よりも親切に、どんに小さな命でも尊重して

自身が出来る範囲を理解して助けている、そんな…

そんな底抜けの優しさを持つている彼にあの人間たちは

「(こんなのが家族とは…彼と同じ人間なんて

信じることは出来ない)」

私は爆発しそうな怒りを抑え込み

「(冬華さんは…)」

今は彼を心配しなくてはと思い隣を見る

「!」

そんな彼は何も見ていない、もしくは

何も見えていない、そんな顔をしていた

目は光を拒絶するような暗さを放っていた

side out 映姫

あー、なんと言うか……俺だって馬鹿じゃない
だから本当は分かりきってたよ、でも見ないふりして
分かりたくなくて自分が頑張れば認めてくれるって
ありもしない希望にすがって現実から逃げてた
いや認めては貰えてたか……俺自身じゃないけど
「いい駒として認められてたって滑稽ですよね」

「……………」

「馬鹿ですよ、本当は使われてるだけなんて

考えば分かるのに、使われてるだけなんて信じたく
ないから頑張れば認めてくれるなんて理想に逃げた」

「逃げた結果が今、簡単に騙されて消されちゃった

俺は化け物だから人間じゃないから当たり前だったんだ」

「それでも恨むとかそういう気になれないなんて、

どうかしてますよね…… 本当はどうかしてますよ」

今俺は支離滅裂な事を言ってるだと思っ

じゃないと自分を保てないから

「涙も出やしない、化け物だから泣けないんですよ

父さんはわかってたんだ、俺に言ったから

『お前は生まれたこと自体が悪』だって

人間じゃないから悪つまりそういうことなんですよね」

「：すみません無駄な事を長々と話してしまつて」

そう無駄なんだこんなこと話しても変わらない

結局悪いのは自分だ、子は親を選べないと言うけど

逆もそうなんだ、だから生まれてきてしまった

自分が悪いんだ

「結局は「もう大丈夫ですよ」……え？」

四季さんか落ち着くような声でそう言いながら

俺を優しく抱きしめていた

「貴方は悪くないです、どんなに辛い環境でも

自身の利益を考えずに他の誰かを助けられる、

それは誰もが出来ることではありません

証拠にあなたほどの善人の魂を私は見た事がないです」

「善人？俺が」

「はい、貴方は紛れもない善人です、周りが

貴方を悪く扱うのは周りの人間が悪であってそんな悪人が根っからの善人の貴方を見て気に食わなかった、それだけの事なんです、誰にでも優しくする貴方はそれをも許容出来る優しく広い器をもった人間です」「俺は別に優しい訳じゃ…：それに俺は化け物」

「でも今泣いてますよ？」

「え？」

そう言われ目元に触ると、濡れていた

「なんで…？」

「それは、貴方は人間だからですよ

、辛いから、悔しいから、悲しいから泣ける泣ける

嬉しくて、幸せで、安心出来て泣ける

正しい感情を持った立派な人間ですよ」

………
ああ………

「泣きたい時は泣いていいんです、我慢しなくていいんですよ、それを咎める人はいません」

俺は初めて感じる暖かさに静かに涙を流した

自分が人間である事を抱きながら

「すみませんお見苦しいものを」

「大丈夫ですよ、私は気にしません」

「アタイも四季様と同じさ、泣ける時に泣いとく

恥ずかしがる事はないさ」

「ええ、あなたは溜め込みすぎて心配だったから

大丈夫よ、それに泣き顔可愛かったからね

泣きたくなったら今度は私が抱きしめてあげるわ」

「……この流れで弄らないでくださいよ」

こっちは恥ずかしいんだから

「本当ですよ紫巫山戯ないでください」

「でも可愛かったでしょ?」

「……五月蠅いです」

「ちよつと四季さん!!ちゃんと否定してくださいよ」

「……冬華さん私の事は映姫とお呼びください」

「え?あ、はい分かりました」

何でいきなりって聞くのは野暮かな？

「フフツ、それじゃあどうするかしら冬華くん

幻想郷に来るかしら？」

「…… はい行きます、行かせてください幻想郷に」

俺はもう一度自由に生きて行きたいから

「そう、良かったわ悪いわね閻魔さん？」

「本来なら審判に割り込むのは黒ですが不問で

構いません」

「素直じゃないですねえ〜四季様」

「黙りなさい、お説教されたいんですか？」

「すみませんでしたあー!!」

仲良いなあ

「それじゃあ、行きましようか」

「はい」

「お気をつけて、お怪我のないように」

「自由を謳歌してきなよ冬華!!」

ああ、ほんと泣きそうだ

「映姫さん、小町さんまた会いましょう!!」

「はい（ああ!!）」

その言葉を最後に隙間に入っていった

本当にありがとうございました四季さん、小町さん

そして……

「着いたわ、ここが幻想郷よ」

「……綺麗だ」

広大に広がる緑に、大きな存在感を放つ山々

自然の力ず良さと前の世界とは違う不思議なそれでいて

居心地がいい

「こんにちは幻想郷……」

ここから新しい人生が始まる

かわいい人形と美味しい紅茶

「着いて早速だけど、また移動するから隙間に

入ってちょうだい」

「?何処に行くんですか」

「貴方の一時的に過ごす家に」

家?… あ、そうだとはいいいけど住む場所はなかった

「:… すっかり忘れてましたよ」

「頭はキレルけど、抜けてるところがあるのね

天然さんかしら?」クスクス

やめてくれえ

「弄らないでくださいよ…」

「ゴメンなさい、反応が可愛いからつい」

「はあ、そうですか」

「フフツ… それじゃあ行きましようか」

「はい!!」

いや〜どんなところなんだろう、楽しみだ

「あ、そう言えば」

「何かしら？」

「紫さんの隙間みたいな力を持つてる人とか妖怪って

いるんですか？例えば映姫さんと小町さん」

映姫さんは分からないけど、小町さんは距離に

関係してそうだな気づいたら後ろに回ってたし

「あら、言ってなかったわねうっかりしてたわ」

「紫さんも何だかんだ抜けてますよね」

「そっちの方が魅力的じゃないかしら？」

紫さんは悪戯を思いついた顔をしながらそう言った

その通り過ぎて何も言えないよ

「……」プレイツ

「本当に可愛い反応するわね… 因みに答えはYesよ」

「やっぱりですか」

「その内貴方にも能力があるかどうか調べに行くわ」

おお〜ちよつとワクワクする

「じゃあ行きましようか」

いざ、仮拠点へ!!

「さて着いたわよ」

「おお、森の中に立派な家が」

木製の言えば外装はかなり綺麗で木も丈夫そう

「気に入ったかしら?」

「はい!!それはもう凄く」

余生を森の中に家を立ててゆっくり過ごす

そんな事を考えていたくらい森の中の生活

を夢みていた

「気に入ったならこのみこころ」住みます!!」

……興奮すると子供っぽくなるわね」ボソツ

まさかこんなにも早く夢に見た生活が実現するとは

これが幻想郷（違います）いい所だ!!

「分かったわ、そのことも踏まえてこれから

少しやる事があるから、そうねえ1週間くらいかしら?」

待ってて頂戴終わったたら能力を調べに行くから」

やる事？ああそうだ俺が幻想入りしたからか

「よろしくお願いします」ペコ

「ええ、それまではゆっくり過ごして待ってて」

「そうさせてもらいます」

「それじゃあ行ってくるわ」

紫さんがいなくなつてからはとりあえず家に入った

「おお〜中も綺麗一人暮らしには少し

大きい気もするけど誰か呼ぶ機会があれば

ちようど良い大きさだな」

まさに理想的だ

「さてとこれからどうしようかな？

今日一日ここでゆつたりするのもありだけど」

せつかく幻想郷に来て外は森だ自然が広がった

世界を前に…

「探索一択でしょ!!」

好奇心には勝てないよな

いやあくやっぱり森はいい!!

生命に溢れてて自由って感じがとつてもいい!!

「ちよつと湿度高めで、空気も特殊だけど悪くないな」

しかし・・・虫以外の生き物が全くいないな

人が居ないのはまあ、暗いから近づくかないってのは

わかるけど動物たちの気配が薄い

「もつと生き物に溢れてると思っただけだな」

まあまだ探索し始めだから気落ちするには早いな

「探索再開だ・・・ありや？」

何だか開けた場所があるぞ

「結構深い森の中に開けた場所、それに家も」

これは動物に遭遇するよりレアなのでは？

「これは、ちよつと訪ねて見ますか」

やはり新参者の私が訪ねるのが礼儀だ

(→テンション高め)

「それでは……すみませーんご在宅でしょうか？」コンコンコン

シーン……

「居ないのかな？」

タイミングが悪かったな、まあ仕方ないか

ここは出直して探索再開だな!!

そうと決まれば「私の家に何か用かしら」後ろ!?

「で、あなた人間じゃない?道に迷ったの?」

そこに居たのは綺麗な金髪の隣には人形が浮いて……

人形が浮いてる?

「(; つム) ゴシゴシ」

「?」

「……人形が浮いてる」

これが紫さんが言ってた能力か

「ああこの子は上海っていうの」シヤンハイ

「かわいいですね」

「そうありがとう、ところで人間の貴方が

どうして……に?」

「そうだ挨拶に来たんだった

「初めまして山神 冬華と言います、自分は今日幻想郷に来たばかりで森の中を探索していたら、この家を見つけたので挨拶をと」

「え？」

「ん？」

「なんか驚愕の目で見られてるんだけど」

「え？あ、ごめんなさい少し驚いてしまっ

「私はアリス・マーガトロイド、括り的には

「妖怪で正確に言えば魔法使いよ、よろしくね」

「は、はいよろしくお願ひします」

「なんか空気が変だぞ？」

「えーと、あなた人間よね？」

「は、はい人間ですよ？」

「体調は？」

「悪くないですよ」

「……」

「えーと……」

「あなた帰れるの?」

「はい、結構近くの方に家があるので」

「はい?」

「え?」

なんかおかしくないか?

「この森の中に?」

「はい、そうですけど?紫さんに言われて」

「...あの隙間妖怪め」

ちよつと紫さんどゆことですかこの状況?

「あのね今あなたがいるこの場所は

魔法の森って言って、まず普通の人間は近寄らないし

妖怪でさえ近寄るのを嫌うのよ、ここの空気は

化け物茸から出る瘴気が充満していて

人間がその瘴気を吸うと体調を崩したり

近づくと“魔法”にかかったような幻覚が起きるの」

「あの茸そんな危なかったの!?!」

「紫は何も言っただけじゃなかったのね...」

「はい……」

ほんと何も聞いてないっすよ紫さあーん!!

「まあいいわ、あなたの能力は?ここが

平気なら能力が関係してるんじゃない?」

「まだあるかどうかも」

「……」

「……」

「(魔力は感じないし、妖怪ではないから妖力はない

霊力があるような感じでもないし……)」

「お茶: : していくかしら? (諦めましょう)」

「お、お願いします (多分諦めたな)」

何だかんだでお茶をしていくことにした

しまあ

「可愛い人形が沢山だ」ワクワク

人形なんて家になかったからワクワクするなあ

「あなた、人形が好きなの?」

「いや、なんて言うか向こうで人形を買って

貰った事がないし人形がある場所なんて連れてって

貰った事がないからさ、自分が人形に囲まれるなんて

なんか新鮮だなって思ってたっけ」

「あなたの家は厳しかったの？」

「……」

「……聞くのはまずかったかしら」

「いや、面白い内容ではないし」

「あなたがここに来たのはそれがあるから？」

「間接的には」

「間接的？」

「あー、俺1回死んだんだよね」

「……え？」

「本当に面白い話じゃないけど、それも含めて

話そうか？」

「……あなたが話しても大丈夫なら」

「わかった……じゃあ話すね」

side アリス

私は今、冬華が幻想郷に来た理由を聞いている
彼はどこか変わってはいるけど悪い印象はない
それに子供っぽさはあるけどその逆として
子供らしからぬ冷静さも持っているように思える
抜けてるところもありそうだけど……
その中でも最も感じるのが溢れ出るお人好し感
幻想郷には癖の強い連中が多いがお人好しもいるが
彼ほど強くはないもつと言うと雰囲気優しい
根っからの善人感と言った方が正しい
だからこそ疑問もあつたそんな彼が何故
幻想郷にまで来て外の世界から離れたのか
彼ほど人格者はそうそう居ないだろうにと……
でも私が思っていた事からは想像のつかない
真実が語られた

「……まあ、こんな感じだよ」

私はサツパリしていると言われるくらいに他人への興味は薄いと言う自覚はある、そんな私でも

わかるくらい今は不快感が胸の当たりで蠢くような

気持ち悪い感覚を覚えている、そのくらい彼の

周りの人間特に家族は同じ人間なのか疑うほどに

醜く感じた、そんな家庭から彼のような優しい

人格者が産まれてきたのも信じられない

「(こんな時、なんて言えばいいのかしら)」

他人に興味を持たなかったから

こういう時になんて言うべきなのか分からない

分からないけど……

「あなたは何一つ落ち度はないわ、周りの

人間があなたの人格に嫉妬して、元家族は

家の事情を理由に雑に扱った愚か者だっただけ

今頃手放した事を後悔してるはずよ

そのくらいあなたは素晴らしい”人間”だもの」

饒舌になって長々と語ってしまったけど

これだけは言っておきたかった

「だからあなたは……で、え？」

彼は優しく笑みを浮かべながら嬉しそうに

そして静かに涙を流していた

「え、ちよつと、え？どうかしたの？」

今日はよく動揺する事が多いわ

「いや、嬉しくてさ」

ああ、そういう事ね

「当然よ、あなたに悪い部分なんてなかったもの」

「それでも嬉しかったんだ、映姫さんに言われて

ちよつと涙脆くなっただけだから」

「地獄の閻魔にも会ってたのね」

1度亡者になっていたから当然か

シャンハイ

「ん？」

「あ、ごめんなさい紅茶を出し忘れていたわ

上海が持ってきてくれたのね」

「そうなのか？」

シャンハイイ コクコク

「そうか：： ありがとな」ニツコリ シャンハイイ!!

「!？」

な、なんなのこの胸を掴まれた感覚

それにあの表情不意打ちもいい所よ!!

「どうかしたのか？」コテツ

「な、何でもないわ」

首を傾げるのもなんか：： いい

「(はっ!!落ち着きなさいアリスこれそう

いつか聞いたことのあるギャップにやられてるだけ)」

何か話題でそらすことにしましょう

「実は今朝ケーキを焼いたんだけど」

「ピクッ

あれ？

「食べる：：かし：：ら？」

「いいんですか!？」キラキラ

「い、いいわよ」

「ありがとうございます!!」キラキラ

これは失敗かしら

「…はい」

「いただきます!!」

本当何でこんなにもギャップに（違うよ）

やられてるのかしら、胸を締め付けられてるよ

で少し苦しいわ

「ん、んまい!!」

まあ、彼も幸せそうだしこんな事が

あつてもいいわよね？

side out アリス

「今日は色々ありがとうございます」

「ええ、私も楽しかったしありがとね」

「はい!!今度は俺の家に今はものがなくて

難しいけど出来たら言いますので是非」

「ありがとう、その時はよろしくね」

「はい!!」

今度は自分の家でもてなさないと!!

「それじゃあアリスさんまた」

「… アリス」

「え？」

「アリスでいいはあとタメ口で、あなたとは

対等の方が接しやすい」

「そっか、わかったまたなアリス!!」

「!?… ええ、また」

「おう」

探索はそんなに出来なかったけど、それよりも

もつといい事があったからむしろいい日だったな

「俺もアリス見たいな美味しい紅茶を

淹れられるように練習しよう」と

そう言つて自分の家に少し軽い足取りで帰った

泥棒？巫女？いや、魔法使いだ！！

昨日は探索とアリスの家で紅茶とケーキ

ご馳走して貰った、幻想郷初日は好調な滑り出し
と言っても良いのではないだろうか？

まあ一人語りは程々にして

「今日も探索だな」

ゆっくりしてと言われたけどここに

住むことになった場合の為に、辺りを把握

している事に越したことはないだろう

それにまだだいぶ先の話にはなるけど

アリスを家に招く事を約束したしな

「今日はまず昼くらいまで探索してから

一旦帰宅して、ご飯食べてまた探索でいいかな」

食材は紫さんがそこそこの量を置いてくれたから

暫くは平気だ、いやあ感謝感謝ー

「よしそろそろ行くか」

新しい場所目指してレッツ探索!!

少年移動中……

「……何も見当たらないぞ」

体感的には2時間程歩き続けている

だが生き物の気配も全くと言っていいほど

していない現状に困惑している

「やっぱり森を抜けて他の場所を探すべきなのか?」

そんな事を考えていると

「……お?」

森の中にぼつんと一軒の家が見えた

「よし、進展があった!!」

「霧雨魔法店」と書いてある

どうやらここは魔法使いの家兼店って感じかな?

とりあえず人がいるか確認だ

「すみませーん、ご在宅でしょうか?」コンコンコン

……
反応がないか

「後ろにいるって……流石にないか」

これは出直しかな

「仕方ない、一旦帰ってご飯食べよ」

途中食べられそうな茸や木の実を

拾いつつ帰路に着いた

「やっとなついたら……あれ？」

帰宅してすぐ、家の扉が開いていることに

気づいた

「ちゃんと閉めたと思ったんだけど」

軽く疑問を抱きながらも閉め忘れたと

納得して家に入る

「た……た……ま……ま？」

「ん……ん……？」

家に入ると金髪の片方がお下げ髪

綺麗な金色の目をしたいかにも魔法使いな

服装の女の子が何やら物色をしていた

「邪魔してるぜ!!」

「え、あはい…いや誰?」

何で家の中に?

「私?私は博麗霊夢、巫女だぜ」

「いや、どう見ても魔法使いですよね?」

まず巫女さんが森の中にいて他人の家を

物色だなんてしてしないだろう、普通の人間でもしないのに

「何だよ、つまらない反応だなー」

「えーと、これって泥棒って事でいいのかな?」

「違う違う、ちよつと見ない家があったから

少しお邪魔して面白いものもんでもないか見てただけだ」

「それって面白いものがあつたら絶対盗むでしょ」

「盗むんじやなくて借りてくだけだ死ぬまでな」

「結局盗むのと変わりないんだよなー」

かなり掴みずらいなこの人

「まあ細かい事は気にすんなって

じゃあ改めて私は霧雨魔理沙 普通の魔法使いだ

私もこの森に住んでるんだぜ何でも屋をやつてるからなんかしらの依頼があれば

霧雨魔法店まで来てくれ、よろしくな」

霧雨魔法店：．．さっきの店はこの人が住んでたのか

「よろしくお願いします、俺は

「冬華って言うんだろ？」．．あれれれ？」

初対面の筈だけど

「さっきアリスのところでき、いつもより

機嫌良さげだから何でか聞いてみたらさ、

お前の名前を出して色々話してくれたんだよ」

「そうだったんですか」

アリスと知り合いだったのか

やっぱり魔法使い繋がりののかな？

「ああ、しかし驚いたぜアリスがお前を

見つけたら気にかけてやれって言ってるな？

基本1人で本読んでるあいつが、他人を

「気にするなんてなんかしたのか?」

「いや、身の上話と軽い会話くらいしか」

「本とか読んでなかったのか?」

「読んでなかったよ」

「ふーん、珍しい事もあるんだな…」

あともうちよい砕けた話し方でいいぜ

歳も大して変わらなそうだし」

「ん、そうかわかった」

「うんうん、それで良いんだぜ!!」

そうだ、私にも外の世界でどう過ごしてたのか

話してくれよ!!」

「別にいいけど面白いようなもんじゃないぞ?」

「いいからいいから」

「わかった話すわ」

そして昨日アリスに話したように

魔理沙にも同じ話をした

少年説明中・・・

「こんな感じだ」

「そんな事が、悪い興味本意で聞くような話じゃなかったのに」

「いや大丈夫だ、俺も了承した訳だし」

「そうか……わかった、ありがとな」

「ああ」

「しかし、お前みたいの良い奴がねえ

周りは何を見てたんだよって呆れちまうぜ」

「俺も受け入れてたのが悪いし」

「それでもだよ、いい事して迫害されるなんて

ふざけんなって思うぜ、褒めるとかして

労ってやるのが普通だろ？」

「まあ確かに」

「だからお前見たいに誰にでも優しく接する

事が出来る奴がそんな生活だったなんて

信じられないぜ」

「ハハッ……ありがとな」

本当に

「ん?別に感謝する事はないんだぜ?

私は思った事を言っただけだしな

「ただその言葉は貰っておくぜ」ニカッ
サバサバしてて掴みにくい所があるけど
根は真つ直ぐで優しいんだな

「おう、そんじゃ俺は昼ごはん作るけど」

「私にもくれよ、お前の料理の腕を

この魔理沙さんが審査してあげようぞ」

少々: : いや大分厚かましいけど

「OK任せろ」

全く憎む気にならない奴だな

「いやあく、美味かったなあ

茸のグラタンとは中々凝ったものを」

「森を探索してたらよく目に入るから

茸を使った料理でいいかなってな」

「なるほどな、しかしほんとに美味しかったな

後でアリスに話しに行くか」

どうやら美味しく出来たようで良かった

「しかし森の中を探索ねえ…迷わなかったのか？」

「ああ、俺の家の周辺って空気が他のところより

淀みが少ないからある程度近くに来れば

家の位置がわかるんだよ」

「へえ、中々凄い事出来るんだなお前

能力かなんか持ってるのか？」

「いや能力を持つてるかはまだわからん」

「そうなのか？」

「ああ、紫さんが俺が幻想郷に住む為に

少しやる事があるからって、だから

能力が判明するまでに1週間はかかる」

「ふむふむ、なるほど」

「まあこれに関しては能力とは別かな？」

俺もよく分からないけど、言うなれば

五感が結構鋭いってとこかな?」

「ほー例えば?」

「目は夜の森の中でもかなりはつきり見える

嗅覚は意識すると相手体調の変化を嗅ぎ分けられる

聴覚は5つの音を聞き分けられる

味覚は下で触れたものの状態が大体わかる

最後に触覚だけどこれが1番特殊で

“そこにいないもの”に触れる事が出来る」

「すっげえなそれ・・・しかし、そこにいないものつて

つまりどういうものなんだ」

「んーそうだな、端的に言えば霊かな?」

「霊?」

「ああ、言い忘れてたけど俺は実在が

曖昧なものを多少感じ取れるんだ

そんな時に感じたものに手を伸ばしたら

触ることが出来たって訳だ」

「いやあく驚いてばっかだぜほんと凄いなお前」

「俺も最初は驚いたよ」

「だろうな……唐突で悪いんだけどさ、冬華は努力をする事ってどう思う？」

「ん？どうして急に」

「何となく思ったからだ」

努力、努力か……

「そうだな、先に結論から言うなら

無駄ではないけどそれが必ずしも報われる

ものではないって所かな？」

「……やっぱりそうなのか」

「て言うのが一般的な結論だな」

「？」

「俺的な結論は自分が求めるものを

突き詰めて突き詰めて突き詰め通すもの

終わりの無い探求を表すものだな」

「どういう事だ？」

「つまり努力は報われる為にやるんじゃない

「何故って? 報われたら努力はそれで終わっちゃう

からな、本来終わりが無いものを努力って言う

俺はそう思うんだよ、終わりを作るとダメだった時

今までやってきた事は間違っていたかもしれない

とか、やるだけ無駄だったとか自分を否定する

かもしれないそんな悲しすぎるだろ?

ならさ終わりを作らなければいいんだ、

俺も最初いきずまっただ時は終わりを

作ってたからなだから一回全部取っ払って

やり直したんだよ、本来立ててた目標を

なしにしてひたすらに突き詰めた、

そしたらな前まで立ててたもんが

通過点くらいで出来るように

なってたんだよな、だから終わりのないもの

を突き詰めるそれが努力だって俺は思うだ」

「.....」

「..... すまん、熱くなりすぎた」

「やっぱ凄いな」

「ん？」

「私もな最近いきずまってるな

自分が強くなる為に魔法の研究とか

色々やってるんだよ、でもどれもイマイチで

自暴自棄になる事も多かったんだよ…」

「… そうなのか」

「でも自分が努力してるのを知られるのが

恥ずかしくてな、誰にも相談出来なかったんだ

それで今のお前の話を聞いたらさなんか

スツキリしたんだよ、上手くは言えないけど

膿が取れたような感じがな

だからありがとな冬華!!」

「… そうか、力になれたならよかったよ」

「おう!!」

強がっていてもその実裏では途方もない努力が

積み重なっている、魔理沙はそんな奴なんだろうな

俺は魔理沙の力とかは分からない、

だけど彼女を見たら何となく積み上げてきたものの

強さを感じるそれはとても大きくそれでいて

とても密度の濃いものだ

「(凄いな魔理沙は)」

魔理沙の努力量はきつと俺が考える

きつと何倍もあるんだろう

そしてこれからもその努力は大きく

なっていく

「(俺ももつと頑張らないとな)」

そう心の中で俺は呟いた

「いやあ、なんか色々ありがとな!!」

「いや、有意義な時間だったし大丈夫だ」

「何だよ、嬉しい事言ってくれるじゃねえか」

ほんとにいい時間だったよ

「そうだ冬華」

「ん? どうした?」

「お前ここに来て2日目くらいだろ?」

だから魔理沙さんがこの幻想郷内を案内
いてやろうと思つてな」

「え? いいのか?」

「もちろんだぜ」

「なら、よろしく頼む」

「了解だぜ、明日から始めるぞ」

「わかった」

ありがたい、なれるにはやっぱり場所

知らない事には始まらないからな

「じゃあ私はここいらでお暇させてもらおうわ」

「ああ、明日はよろしくな」

「おう!! それじゃ、またなあ〜」

そうして魔理沙は箒に乗って飛んで行つた

明日からが楽しみだ

side 魔理沙

『終わりのないものを突き詰める』

それが努力だって俺はおもうんだ』

この言葉が鮮明に浮かんでくる

そしてその言葉に今私は力を貰ったように

感じている

「なんかいい気分だ」

最初私は冬華の驚くような才能に嫉妬に

近い感情を抱いていた、私には大した

才能がないから何処か羨ましかったんだろう

でもあいつは才能にかまけることはなく

自分なりの努力を持ち高めていた

それを聞いた時は妬ましく思った

自分が恥ずかしくなった、

才能があるから努力してないなんて

思ってしまった、私はあそこまで

努力について語れる奴を見たことがない

だから素直に尊敬した

「これからは更に楽しくなりそうだぜ」

私はこれからも終わりのない努力を

私にしか出来ないものを探求していく

突き詰めて突き詰めて新しいものを求めていくんだ!!

s i d e o u t 魔理沙

人里にLET'S GO!!

「今日は何処を案内してくれるのかなあ〜」

魔理沙と案内の約束をしてから少々テンションが

上がっている、やっぱり新しいものを探すと言うのは
幾つになってもワクワクするのだろうか

「お、きたのかな?」

家の近くに2つの強い気配… 2つ?

「おはよー冬華、魔理沙さんが来たぜー」

勢いよく突撃してきた魔理沙と

「ちよつと魔理沙ノックくらいしなさいよ、

おはよう冬華」

呆れた表情をして魔理沙に注意するアリス

魔理沙はわかるけどアリスは何でだ?

「おつす、アリスはどうしてここに?」

「あー、それはなお前を案内するのにアリスも

参加って事になったんだぜ」

ほうほうそういう事ね

「悪いわね、唐突に」

「いやいや全然、驚いたけど親交を深められる

から嬉しいよ」

「そ、そう（嬉しいんだ…）」

「ところで魔理沙今日は何処行くんだ？」

「ん？ああそうだなまずは人里だな」

「そうね最初ならそこがいいわね」

人里かてことは色々ものが売ってあるな

服とか見ておきたいし

「OK了解した」

「よし、じゃあ出発だぜえ〜!!」？*。？（??*）??*。

「おー!!」（*☒O☒*）？

「（可愛い…）」

「着いたぜ此処が人里だ!!」

「おー、人で溢れてる」

2日も森の中だったから中々感動する

「そういえば妖怪とかは人里とか来たりするののか?」

「ああ、来るぜアリスもたまに人形劇をやり」

来るもんな? 祭りとかは毎回やるし」

「ええ、たまにね」

へえ、人形劇かあ

「俺も見たいな」

「… まあそのうち」

「(素直になれない反応… 笑いそうになっちまうぜ)」

「そっか、ありがとな」

「… 別に」

「www」

「魔理沙? 何で笑ってんだ?」

「いやあ何でもないぜ」

「そうか」

「ああ、じゃあそろそろ見て回るか」

「そうね、ゆっくり回りましょう」

少年少女移動中・・・

「まずは此処だな」

看板には鈴奈庵と書かれている

「(ハハ)は？」

「ここでは外来の本を扱っているの、私も

たまに来たりするは」

「私もだけ、外の世界は何だかんだ気になるからな」

外の世界の本か

「(本も幻想入りするのか)」

それか紫さんだよな

「て言っても冬華は外来人だからそこまで

利用しないかもな」

まあ確かにそうかもな

「まあ気になったら寄ったりするかもな」

「どうする入るか？」

「んー、いいかなまた今度ゆっくり見たいし」

「そうね今日は案内がメインだからね」

「OKわかったぜ!!次行くぜ」

再び移動中・・・

「次は寺子屋だぜ」

寺子屋か昔の学校見たいなもんだな

「私が行ったことないのよね」

「私もないぜ」

ないのか・・・

「俺はあっちの世界で同じような所に

通ってた」

ろくな思い出はなかったけどな

「よし次々、どんどん行くぜー」三／?／

「行くぜー」((っ・ω・)っ

「(可愛い・・・)」

side ???

「な、何で冬華くんがここに」

それにアリスさんと魔理沙さんといる一体いつ
幻想郷に？それよりも

「どうしよう」

私は彼が受けた仕打ちを知っているし
実際にこの目で見て大人に相談したが、
真面目に取り合ってくれない所か何処か
それが当たり前のような顔をした

「それが原因で、それに」

彼がいじめを受けていた時私はこつそり
彼と話をしようすればいいか一緒考えていたけど
幻想郷に行かなければならなくなつて
急遽引越しと言う形でこつちに来た

「だから逃げたと思われて」

気まずい、彼と会うのがすごく気まずい
出来れば会わないでやり過ぎたいけど
魔理沙さん達と知り合いつて事は何処かしらで
会う可能性がある

「どうしたらいいの…」

考えても考えても答えは遠ざかっていくだけだった

side out ???

「うーん、少し歩き疲れてきたから休憩するか？」

そうだな森から歩いてきたわけだし

「俺は休憩でも大丈夫だアリスは？」

「そうね、私も休憩で大丈夫よ」

「じゃあ団子屋まで行こうぜ」

「団子…」

「休憩にはピッタリね」

やったね!!お団子だお団子

「よし行くぞー!!魔理沙ー、アリスー!!」

「お、おう… 冬華テンション上がってないかアリス？

(子供っぽい所もあるんだな)」

「… 甘い物が好きなのよ(可愛い…)」

「美味しいなこの団子」

「そうだろそうだろ」

「これは常連になりそうだ、いや常連になる

「ここの団子は絶妙なバランスよね」

「でもアリスの作ったケーキも凄い美味しかった」

「そう（嬉しい：）」

「へー、なーアリス私にも食べさせてくれよ」スリスリ

「鬱陶しいわね、そのうちね」

「おう!!」

うーん、微笑ましい光景だ

「いい感じの時間になってきたな、今日はここら

辺で終わりにするか」

「そうね日も落ちてきたし」

「じゃあ、冬華もアリスもまた明日な!!」

「ああ、また明日な」

「ええ、また明日」

そんな感じで各々の家に別れた

「いやあく楽しかったな明日はどこに……ん？空が」

赤い霧？が広がってるなんだろ

「気になる……」

発生場所はここから見えるし

「気になったから行くしかないな!!」

好奇心には勝てないから仕方ないな

紅霧で危機一髪か!?

「んーむ」

やっぱり霧が濃くなることに暗くなる

「まるで意図的に夜を作ってるような？」

考え過ぎかな？

「？前から霧とは別になにか来てるな」

雰囲気的には闇に近いな

「黒くて丸いモヤ？」

ドンッ!!

あ、木に衝突した

「痛たたー」

「大丈夫か？」

「うーん大丈夫なのだー」

「おう、そうか」

「そーなのだー」

そーなのかー

「なんか力が湧いてきたから調子にのって

闇を出しすぎたのだー」

それで前が見えなくなつたのか

てか自分で出したのに自分で見えなくなるのね

「前が見えなくなるのに闇を使うのか?」

「そーなのだー前が見えなくなるのが

闇の風物詩なのだー」

なるほど、確かに

「人間のお兄さんは何でここにいるのかー?」

「それは、あの赤い霧が出てるところが気になるからだ」

「そーなのかでもお兄さん?この霧って多分

人間には悪いものだとおもうよ?」

「そうなのか?特に何も無いが」

「んー、そーなのかー面白いねお兄さん」

面白いのかな?

「お兄さんの名前はなんて言うんだー?」

私はルーミアなのだー人食い妖怪なのだー

「よろしくなルーミア、俺は山神 冬華だ」

「トウカって言うのかよろしくなのだー」

「おう、人食い妖怪って事は俺食べられちゃうのか？」

「んートウカは食べれそうにないし

そもそも今はお腹すいてないのだー」

「食べれそうにない？よくわからんがそれなら

よかったよ」

「(よく分からないけど食べちゃいけない気がするのだー)」

「でもトウカ美味しそうなのだー」

「ちよつと、食べないって言ったそばから

美味しそうとか言うなよ怖いだろ」

「いい匂いがするのだー」

無視かい、まあ食べられないならいいか

「じゃあ俺はもう行くからな」

「わかったのだーまた会うのだー」

「ああ、またなー」

そう言ってルーミアは闇を纏いながら

また飛んでいった

「さてと行きますか」

「お!!大きな湖の向こうにデカイ館が見える」

しかしここの気温少し低くないか?

いや水辺だから気温が落ちるの当然か?

いやそれにしては低すぎないか?

「ちよつとそこのアンタ!!」

ん?

「アンタよ人間のアンタ」

「どうかしたか?」

「あたいのテリトリーに人間が何のよう」

テリトリー? ああ湖のことかな

「それはこの湖のことか?」

「そうよ!!」

「いや俺はここじゃなくてあの館に」

「騙そうたつてそうは行かないわ、この最強の

あたいを倒してここを自分のものにしてしようとしてる

だろうけどそうはいかないぞ!!」

「(本当なんだけどな)」

んーどうしたらいいのだろうか

「何を黙って… そうかあたいを倒そうと作戦

を立ててるんだな!!なら先手必勝だ」

「うわっ!?!」

危な!?!唐突な攻撃はびっくりするわ

てか俺がいた場所凍ってない?氷を作る能力か?

てかここら辺の気温が普通より低いのはこの子が

原因か、よく見ると纏ってる雰囲気冷たい

「上手く避けたわねやるじゃない」

「そうか、ありがとな」

「ならもつと本気で行くよ」

そう言つてさつきよりも大きな冷気の波が

向かってきた

「ほいっと、危な… うわあ」

俺のいた場所から後方10mくらいが見事に凍っている

「ガチかよ」

「(こんなん車に轢かれた方がマシだな)」

「これも避けるなんてアタイを倒しに来ただけは

あるわね、でも長引かせるのは最強としては

格好つかないから必殺技を使ってあげる」

必殺技? さつきよりもやばいの来んの?

「喰らいなさい」『電符「ヘイルストーム」』

何だあの子を中心に氷の竜巻が起きた

「凄いエネルギーだ」

強い冷気が集まっているこの後何か来るな

「いくわ!!」

「やっべえな」

バカでかい電が大量に降ってきた

「俺もやるしかないな」

逃げ場がないなら耐える!!ここでまた死ぬ気はない

「(これを耐えるには：．あれだな)」

アニメや漫画で幾度と見てきた

「よし、バンクさんお借りますよ」

「(何?あの構え、水が流れてるように

それに強い川みたいな光景が浮かんでくる)」

シルバーファング 直伝『流水岩碎拳』

「オラアアア」

「!?あたいの作った電が」

やばい、思っていたより氷の質量が重たい

気を抜いたら：．いや弱音を吐くな俺

適応だ適応するんだ今までみたいに

「スウー：．」

「(集中だ．．．)」

「なに!?どんどん早く強く」

思い浮かべるは静かだが力強い破壊力

全てを受け流す川の流れ、そうまるで矛盾のような

そんな感覚を……

「(これで)」

「終わりだ!!」バキンッ!!

よし、どうにか受けきった

けどもつと上手く出来るように鍛錬するか

「手が痛てえ」

冷気で動きが鈍く……てのは言い訳か

かなり両手がボロボロだ

「お前……」

!?!まだ来るか

「凄いな今の!?!」

て、ありや?

「あたいの必殺技を素手で防ぐなんて!?!」

「ああ、相性が良かったからな」

「あたいはチルノって言うは、幻想郷最強の

氷の妖精よ!!」

「そ、そうか、俺は山神 冬華だ」

「トウカだな!!よろしくたのむぞ」

「ああ、よろしくな」

「これは大人しくなったのかな？」

「あたいの本気の技を素手で受けきるなんて

トウカが初めてだ」

「いや結構ギリギリだったぞ、チルノが

もつと能力を上手く使えてたら危なかった」

「?あたいは上手く使えてるぞ?」

「無駄に力を出してるんだ」

「力を出せば出すほど強いんじゃないのか」

「いや、沢山だすよりは力を一点に集中させる方が

相手に与える時のダメージとか、攻撃速度が早く

なったりするんだ」

「そうなんだな!!」

「例えば今チルノは冷気を撒き散らしてる状態だ

それだと攻撃の時に威力が落ちちゃうんだ」

「ならどうしたらいいんだ!!」

「そうだな、自分の事を瓶だと思って

その瓶の中に自分の能力を入れて蓋をする意識で
自分の中に力を留めてみてくれ」

「おう!! やってみる」

おお、感覚がいいのかすぐに安定してきた

素直だから覚えやすのかもかもしれないな

「おお、なんか力がいつもより湧いてくるぞ」

「その感覚だ、それを続ければいつもより

数段力強い攻撃が出来るぞ」

「凄いなあ」

「あとはそうだな、チルノの能力は冷気を操ったり

氷を操ったり出来るのか?」

「そんな感じだぞ」

うむ、中々強いな

「じゃあ作った氷を操ったりは?」

「試したことないから、今やってみる!!」

やった事ないのかい!!

「おお、トウカ出来たぞ!!」

「よし、そしたら飛ばした氷の軌道を変えたり

練習したら氷で分身とか出来るんじゃないか?」

「そうなのか!?!そしたらあたいはもつと強く

なれるのか!!」

「ああ、その為には力の練習しないとな」

「練習!..でももつと最強になる為!.. あたい頑張るぞ

そしたらトウカが防げないくらい強く打てるよう

になつてやるからな!!」

「ああ、楽しみだ!.. と練習するなら俺は

離れた方がいいな、じゃまたな」

「おお、またな」

いやあ結構危ない事をあつたが何だかんだいい子

で良かったな!.. そんなじゃ

「今度こそあの館に行くか」

「ようやく着いた!.. て」

あれ門番だよな?寝てるんだが、門番…だよな?

「まさか門番が寝るなんて…でも」

あの門番寝てはいるが気を張り巡らせているな

どうやら避けては通れないようだ、

門番だから当然か…寝てるけどな!!

「(基本的に戦闘は避けたいからなあ

話し合いで何とかならないかな?)」

「あの一」

「…スピー」

「ちよつといいですか?」

「…スピー」

「あの一!!」

「ピクツ…スピー」

ウソやん、起きないじゃんこの人

「うーん困ったなこつそり入れるような感じ

では無いでしょうか」

揺さぶろうにも近ずいたらダメだしな

「よし、ちよつと気は進まないが」

あれをやるう、悲鳴嶼行冥の技？では無いが
凄まじい破裂音のような拍を

「1回やってからトラウマなんだよな」

いじめから逃げる為に猫騙しの為にやったら

いじめつ子達が白目剥いて倒れた時のやつちまった感

あれは今でも忘れられない

「これで起きてください… よ!!」 スパアアアン!!

「うっはあ!?!なにになに」(。口。;三;。口。)

「よかった起きた」

「うえ？何したんですか?」

「少々小さな音を」

「何処が少々何ですか!!心臓止まるかと

思いましたよ、何の音ですあれ」

「何度か起こそうとしましたよ、拍ですよ拍」

「は、拍？両手合わせたただけであの音?」

「まあ、はい」

「ほえ、凄いですねそんな事が…」

「危ないから使いたくないですけどね」

「だったら使わないでくださいよ!!」

「だったら呼びかけたら起きてくださいよ」

「ぐぬ、何も言えないです」

「でもごめんなさい本当に使う気はなかった

んです、気が進まなかったけど最終手段何で」

「申し訳ないです、それであなたは…」

あなた人間じゃないですか!? どうしてこんなところに

ていうか何で平気でたってるんですか!!

この赤い霧は濃い魔力で出来ていて普通の人間は

この霧の状態では体調に異常がでるはずで」

「それは知りませんよ自分は能力もちか

どうかなんて知らないですし… それよりも後半の

それは本当何です」

「はい、これはお嬢様が幻想郷を支配する

為に必要な事なのです」

これは、見過ごせないな

「俺が何故ここに来たのかは霧が出ている場所
が気になって来たんですが、目的変更です

霧を止めさせて貰います」

「悪いですが霧が効かないとはいえ人間のあなたに

妖怪の私とでは元々の…!?!」

「俺は幻想郷に来て3日程度の新参者でね

ここで自由に生きて行くって決めてるんで支配なんて

させる気はないですよ!!」

「(とても強い気迫、隙も全くないし腕を

見るだけでわかる異常ともいえる筋肉の質)」

「申し訳ございません、貴方を侮った事を訂正させて

頂きます、私は紅美鈴この紅魔館の門番、貴方が

我が主の邪魔をするというのなら、この紅美鈴

全力で阻止させて頂きます」

そして臨戦態勢に入った

「… 私は山神 冬華と言います、美鈴さん

力づくでも行かせてもらいます」

俺も戦闘態勢になり一触即発のピリピリとした
空気になる

「いざ!!」

「(やばい、この人肉弾戦めちやくちや強い!?)」

チルノのように氷を上手く使う攻撃では無い
純粹いな打撃技の威力が高い

「(様子見なんてしててる場合じゃないな)」

『流水岩碎拳』

「!?(気の流れが変化した?何より完全に

技を流されている・・・これは出し惜しみする
必要性はないみたいですな)」

「(何かにかけて・・・グッ!?)」

打撃の威力が跳ね上がった?

「(受け流しきれない)」

このままじゃジリ貧だ攻めに転じる為には

何かないのか…

「あれをやろう…」ボソツ

「(あれ?)」

正直この先を考えるなら使いたくないけど

そうも言つてられない

『静動轟一』

「な、何だ、気の流れが2つに増えた!?!」

「この技消耗やばいんで早く行きますよ」ダツ!!

「(はつや!! 荒々しい気と静かな気が同時に…)

身体能力の底上げだけじゃない、技のキレも

段違いに上がっている)」

やっぱり、感情が昂るなこれ

もつて3分くらいの自己暗示見たいなものだ

「(若干押されている… もつと妖力を上げて

押し切らせてもらいますよ!!)」

「(また威力が上がった!?)」

未だ拮抗状態が続いてい事に両者

若干の焦りが出てきた

「(これ以上は妖力が持たない)」

「(これ以上は意識が持たない)」

同時に距離をとり呼吸を整え

「次で終わらせますよ!!」

「俺もだ!!」

決着が着く時が来る

「はアアア『真紅星脈地転弾』」

「(最後にヤバい技を)」

凄まじいエネルギー弾が向かってきた

「(受けきったら勝ちだ腹くくれ俺!!)」

両手に気を集中させた、それはとても

攻撃的な気でその霧囲気に離れていた美鈴は

息を飲んだ

「(こつちに向けられた訳では無いのに

気圧されるほどの気迫を!?)」

「チエストオオオオ!?!」

そんな雄叫びと同時にエネルギー弾を

削り取るように強烈な連撃を放つ

「(どんどん削られていく!?)」

その光景を見て美鈴は驚くことしか

出来なかった

「ハア…ハア…防ぎきったぞ」

「…」

絶句するしかない人間?に妖怪のかなり本気の

技を素手のみで防ぎきったのだから

「(もっと早く…いや今更何考えても言い訳にも

ならないよね)」

「負けちゃったな」

「最後まで本気の本気ではなかったようですけどね」

「それでも負けは負け出し妖力使い過ぎて

動けませんよもう…(咲夜さんに怒られるな)」

「じゃあ通らせて貰いますね」

「出来れば帰って欲しいですが…御気おつけて」

「…はい」

どうやら今以上に大変な事が待っていそうだ

一方、紅魔館手前の湖では

「アタイの弾幕をくらいな!!」

「うわっ!!」

「ふんっ!!」

「ちよつと… あいつほんとに妖精?」

「間違いなく妖精の筈だぜ?」

「ちよつと強くないかしら」

「ああ、かなり厄介だぜ」

アドバイスによって強化されたチルノに

悪戦苦闘している2人がいた

「お邪魔します」

館の中は思ったよ… あれ?

「何か外から見たよりも大きく感じる」

まあ目的は変わらないから関係ないか

「さてと……!!」バツ!!

突如飛んできたナイフを掴んだ

「随分な歓迎だな、ナイフなんて」

「お気に召さなかつたかしら？」

やっぱり来るのは想定済みだったのか

「いやあ、紅茶とかだと嬉しいなあ」と

「図々しいわね貴方……門番がいたはずだけど」

「ギリギリだけど退いた、今は力の使い過ぎで

休んでるよ」

「そう……（人間の筈よね？美鈴を倒すなんて

油断は出来ないわね）」

「来てもらって申し訳ないけど早々におかえり

いただけるかしら？」

「悪いけどそれは出来ないな、霧を止めて

貰わないといけないからな」

「そう……なら容赦はしないわ」

瞬間世界が止まった… だが

「うわっ!? 景色が」

「は?」

止まった筈の世界に入門する人間が1人

「(何故動けるの!? 確かに能力を発動したはず

動けるわけない)」

「どうなってんだこれ」

「(それはこっちのセリフよ!!)」

「… よく見たら時計とかカーテンとか不自然に

止まってるぞ」

まさか時間を止めるとかいう能力か?

でもならなんで俺は動けてるんだ?

「何で貴方はこの止まった世界で動いているの?」

「(ガチで止めてたよこの人)俺もわかりませんよ」

「(能力が効かないならマズイわね、美鈴を退けた

という事は肉弾戦が強いはず)」

「(まださっすきのダメージが、ここは逃げるか)」

「逃げるが勝ちだぁー!!」 バツ!!

「え?てはや!! (とても追いつけるほどの

速度じゃないわね、本当に人間なのかしら?)」

「あの先は… (妹様の部屋…)」

「運がないわね」

よし!!追ってきてはならないな

「逃げきれたはいいが」

広すぎてわからん

「どこに行けば…ん?」

地下に続く階段がある

「風潰しに探すか」

骨が折れそうな作業だな…

「はぁ…ん?」

この扉の中から音が?

「誰かいるのか?」

地下室に…まさか黒幕か!?

「(わざわざ地下にいるんだ可能性はある)」

「失礼しま…す?」

… いない?

「子供部屋か?」

キングサイズの大きなベッドの人形が沢山ある

いかにもな子供部屋だ

「しかしなんでこんな地下に?」

「ねえ…」

!?!後ろから声が聞こえた

「貴方は誰?ここに何しに来たの?」

そこには金髪のドアノブカバー見たいな帽子を

被った羽の生えた女の子がいた… てか俺後ろとられすぎ

「ああ、俺はこの館から出てる霧を止めて貰おうと

お願いをしに来ただよ

「ふーん」

この子自分から聞いたのに興味ないな

「お兄さん名前はなんて言うの?」

私はフラン、フランドール・スカーレットて言うの」

「あ、ああ俺は山神 冬華だ」

「トウカって言うのね… ねえトウカ!!」

「ん? どうかしたのか?」

「私と遊びましょう!!」

紅魔館門前…

「いやぁー大分時間食っちゃったな」

「なんだったのかしらあの妖精」

「そうだな”練習”してみたいな弾幕だったな」

「しかも氷の軌道を変えたり… まあいいわ

今は前の館ね」

「そうだな… て誰かいるぞ?」

「門番でしょ、ちよつとそこのアンタ!!」

「ん? 次は誰ですか?」

「私は博麗霊夢で」

「私は霧雨魔理沙だけ、この赤い霧を止めに来たんだけ

「ところで何でここに座ってんだ？門番何だろ？」

「私は紅美鈴です…。今は動けないんですよ」

「動けない？どういう事よ」

「私は負かされたんですよ、それで力を

使い過ぎて今動けないって事です」

「負かされた？誰か来たのかぜ？」

「冬華さん」

「「え？（誰よ）」」

「山神 冬華と言う人間に素手で負かされたんです」

「（妖怪相手に素手？） 本当なの？」

「はい、純粋な素手のみの武力に完敗ですよ」

「（本当に人間？私だって霊力なしの肉弾戦で妖怪

の相手なんてやれないわよ）」

「ちよつとまで冬華がここににいるのか？」

「はい、霧が出ているここに興味があつて来たらしい

とか、そしてこの霧が普通の人間に害があると

話したら霧を止めてもらうようにと言つて、

私を負かして紅魔館に入って行きましたよ」

「はあ？アンタの話じゃ魔力も妖力もないんでしょ？

それってやばいんじゃないの？てか魔理沙そいつの事

知ってるの？」

「あ、ああ最近幻想郷に来たばかりの奴だ」

「(じゃあ能力だつて使えてなさそうね)」

「呑気話してる場合じゃないぜ、霊夢私は

先に入ってるぜ!!」

「ちよつと魔理沙!!」

「… 貴方も行ってください」

「いいのかしら？門番何でしょう」

「私は動けないですし」

「そう、じゃあ行くわね」

「… 出来れば彼を」

「まあ、出来たらね」

「キャハハ!!まてまてー」

「ヤバいやバいやバいや!!」

遊びましようなんて言われて始まった鬼ごっこ
捕まったら壊すだって? 鬼ごっこってそんな
物騒な遊びだったっけ?

「トウカは飛ばないし弾幕撃てないのに凄い

避けるね!!もつと本気でいくよ!!」

まじ!?今の状態でいっばいいいっばいい何だが!?

「(もっかい静動轟一を...だがこれ以上は)」

「考え事している余裕何てあるのかなあ!!」

「(そうだな... やってやる)」

『静動轟一』

「ハアッ!?」 ドツ!!

「(あれ? 雰囲気が変わった?)」

「(気の昂りを抑えろ... 適応するんだ)」

後先考えてられん

「逃げ切らせてもらうぞ!!」 バアッ!!

「わあ!!速い速い!!」

逃げるとは言ったがどうするか

「トウカ面白ーい!!じゃあもつともつと行くよ」

「(弾幕の密度が濃く)」

避けきれない、避けきれないなら

「撃ち落とすだけだ!!」

「へえ、トウカは戦闘も出来るんだね!!」

「まあ、それなりにな!!」

弾幕を素手で弾くの痛いけどな!!

「・・・鬼ごっこは終わり」

「ん?」

終わったのか?

「今からやるのは戦闘ごっこだよ!」バアッ!!

「グッ!」ドゴンッ!!

凄まじい蹴りを食らって壁際まで吹っ飛んだ

「(何だあの蹴り・・・受け流しきれない程の

純粹な力と反応しきれないほどの走り出しの

瞬発力・・・やばいな)」

「どう凄いでしょ？吸血鬼の身体能力」

（吸血鬼なのね） ああ、腕で防がなかったら

死んでたかもしれないな」

「まだ壊れちゃダメだよ、これからなんだから!!」

そこからは凄まじい勢いのラッシュを

ギリギリで交わし不完全だが捌きを続けている

「反撃しないと勝てないよ!!」

「俺は怪我の痛みを嫌と言う程に刻み込まれたからな

出来れば平和的におわらせたい」

「それは、手を抜いてるってこと？」

「何言ってるんだ防戦一方だこっちは」

肉弾戦で勝てない以上どうしようもない

（静動轟一もそろそろ限界が近いし）」

どうすればいい、どうすれば…

「戦闘中に考え事はダメだよって」

「!?（やばい!!）」

「言ったよね!!」

「あがアっ!!」

壁をぶち抜く程のパンチがモロに入った

「(死ぬ…… まじで死ぬ、静動轟一もきれたし

流水岩碎拳も今の俺の水準じゃあの規格外な

威力の打撃を受け流しきれない)」

何より今ので防いだ右腕は使い物にならなくなった

「(肋も2〜3本折れてる、もうまともに……)」

「トウカもうダメそうだね、もっと遊びたかった

けど可哀想だから壊してあげるよ」

……この子

「……なあ壊すのって楽しいのか？」

「そっだよ!!」

やっぱり

「……本当はそんな事、ないんじゃないか？」

「……何が言いたいわけ？」

「いや、確かに鬼ごっこ?とか戦闘してる時は

本当に楽しそうだった、だが壊すと言う時の

フランはな俺には本心のようには見えなかった」

「!?!?!? そんな事ない!!壊すのは楽しいの

壊して、壊して、壊して…それが…それが」

この子の精神状態は不安定なんだろう

多分だが長い間地下暮らしをしていたはずだ

吸血鬼だ俺よりも何十倍も生きていても不思議

じゃない

「私は、壊すことが…」

それに本当は自分でもわかっているんだろう

壊したいと言うのは本心ではないと

「フランはさ外出た事あるのか?」

「ううん、ないよお姉様が貴方な力は

危険だからって…」

「…」

「本当は自分でもわかっているの危険な力だって」

「だから自分に納得させる為に壊すことを

好き好む自分にして危険な存在であるようにした、

そんなところか」

難儀な話だな

「もう400年以上は地下で過ごしてるの」

「400年…」

これが吸血鬼にとつて長いか短いか分からない

だがあの地下室と言う狭い世界は俺だったら

耐えきれないだろう

「…どうすれば良かったのかな」

「外に出たくはないか?」

「出たいけどお姉様は」

「ならば、今から行くかそのお姉様に会って

外の出てもいいようにお願いしにき」

「え?でも私の力は…」

「大丈夫だ昔はどうか知らなかったけど

さつきまでのフランは力をちやと使えてた」

「そうなの?」

「ああ、じゃなかったら俺はバラバラに

なつてたかもしれないからな」

「でも、トウカに怪我させちゃったし」

「遊びに怪我は付き物だから気にすんな」

「(やった私が言うのはあれだけど遊びで

出来るような怪我じゃないと思う...)」

「それじゃ、外出許可を取りに行こうか」

「大丈夫かな？」

「何とかなるだろ、姉や兄に我儘言うのも妹の

特権って奴だからな」

「じゃあトウカはお兄様だね!!」

「ん? 何でだ？」

「何となく!!」

「? そうか (俺の方が年下何だが、まあいいか)」

「あつ冬華!! てお前その怪我」

「魔理沙見つけたの？」

「ああ、見つけたんだが」

「魔理沙と誰だ？」

「私は博麗霊夢よアンタその怪我どうしたのよ」

「俺は山神 冬華だ、まあ何だ少し遊んでた」

「(遊びで出来る怪我じゃないだろ!!)」

「お兄様？この人達は？」

「ん？ああ片方は知り合いでもう片方は

初対面だな、フランも自己紹介しとけ」

「わかった… わたしはフランドール・スカーレット

吸血鬼よ」

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ」

「私は博麗霊夢、巫女よ」

巫女か、て事はこの霧を止めに來たって解釈でいいか

「ところで、今何してんだ？」

「ああ、フランの外出許可をな姉から貰いにいく

のと、フランの話で霧を出してんのがその姉らしいから

霧を止めて貰うように言いに行くんだ」

「いや、こんな事起こした奴がお願いで

「辞めるわけないでしょう?」

「いや、お願いして終わるなら平和的で

いいかなあなんて」

「…魔理沙こいつ変な奴ね」

「まあ、変わったヤツではあるな

でも良い奴なのは確かだぜ!!」

「それはまあ見たらわかるけど」

「ずっと思ってたがわかるもんなのか?」

「お兄様そろそろ行こう?」

「そうだな行くか」

「何でお兄様なんて呼ばれてんだ?」ボソッ

「俺もよく分からん」ボソッ

「さてとそろそろフランの姉に会いに…バタン!!」

「!?!」

「おい冬華どうした!?!」

「お兄様!?!」

「やばい、流石に動き過ぎたわ」

「そう、じゃあアンタはここで休んでなさい」

「ああ、悪いな」

「仕方ないぜ、怪我人を無理矢理つれて

く訳には行かないからな」

「お兄様…」

「…大丈夫だフラン、お前の姉もわからずやつて

訳じゃないだろ？言いたいこと言えばいいんだよ」

「うん、私頑張るから終わったら一緒に外を

冒険しよう？」

「ああ、約束だ」

「じゃあそろそろ行くわよ」

「気をつけて行けよ」

「怪我人に言われるのって変ね」

　　違いねえな

「頑張るねお兄様!!」

「ああ、待ってる」

「時の中にただ 漂う我が身よ〜♪」

はあ、怪我で動けない何て情けないな俺

ここまで来て任せるなんて押し付けた感じで

何だか複雑だ

「安らかに眠る日を 待ち焦がれている〜♪」

「あら?」

「古城の… あ、さっきのメイドさん」

マズイな今はまともに動けん

「… オレトタタカツテモジカンガモツタイナイ」

「何を考えてたのか知らないけど、私もさっき

巫女にやられたわ思いっ切り、だから戦闘何て

出来るほどの余裕はないわ」

あ、そうなのか

「(よく見るとかなり疲弊してるな)」

「そう言えばまだ名乗ってなかったわね、

私の名前は十六夜 咲夜この紅魔館のメイドよ」

「俺は山神 冬華だ、普通の人間だ」

「普通の人間は止まった時間を動けないわ

私が言えたことではないけど」

「(何も言い返せない……)」

「そう言えば貴方、妹様には会ったの？」

「フランの事か？それがどうした？」

「よく無事……では無いわね」

「まあ、死ぬよりマシだな」

「それで、妹様は今何処にいるの？」

「今は外出許可を貰いに姉の所だ」

「え？本当なの？」

「ああ本当だ」

「そう……」

「何だ、心配か？」

「ええ……」

「そうか、でもまあ大丈夫だろ姉妹喧嘩は起こる

かもしれないが2人の仲を戻すには1番だろ」

「そんな簡単にいくのかしら？」

「大丈夫だろ、フランの姉なら多分妹の事を考えての

地下暮らしをさせたんだろ？不安定な時期で

力の制御が難しいから苦渋の決断ってやつだろ」

「…わかるのね」

「いや、分からないさ、これが一番ピツタリハマる

気がしただけだ」

「いえ、それであつてるわ、お嬢様も

『あの子には…フランには悪い事をしたわ

だからここを手に入れてフランも自由になれる

場所を作るのよ』そう仰つてたの」

「だったらもう解決だな」

「どういう事？」

「フランさ確かに不安定だったかもしれない

でもそれはだったて話だ、今のフランは力を制御

出来てるし情緒だってちよつと幼さが強いけど

落ち着いている、多分だが長い時間を使って

直せるようにしてたんだよ」

「…」

「難儀だよな兄弟姉妹って、一番近いはずなのに
すれ違いが多くて歳が過ぎれば過ぎるほど

お互いの関係せいは複雑になっていく」

「…」

「それに拗れると変な意地で長引く」

「…」

「でも家族なのにそんなのって悲しいだろ？」

まあ俺が言えるような事じゃないけどな」

「… 貴方は兄弟がいるの？」

「ああ、いたよこつちに来る前に」

「… 仲が拗れていたの？」

「いや俺は家では家族として見られてなかったから」

「え？」

「だからこれは俺の家族とか姉妹兄弟に対する

理想論だよ、血の繋がった家族がいるのに

仲が悪い何て見えて悲しからさ」

「なんて言うかお人好しなのね貴方は」

「そんな事ないさ、俺の我儘がたまたま

その人の救いになったりするだけだ、

だから今回も俺の我儘だそれで仲直り出来たなら

それは当人たちが解決したそれだけだ」

「頑なに認めないのね、でもカツコイイわね」

「そりゃな、かつこつけてるからな」

「そうね・・・ 私は行くわ従者として」

「そうか、なら俺はやられたってことで寝るわ」

「あら、それじゃあ私が悪者みたいね」

「茶化すなよ、普通に動きすぎて疲労がな・・・」

それに侵入者の対処をしたって事にすれば問題ない」

「仕事を全うしたって事ね」

「そゆこと」

「じゃあ、この場は見なかった事にするわ

貴方が妹様に好かれていたら私が大変なもの」

「・・・ お見通しですかそうですか」

「ふふっ、じゃあお休みなさい」

そう言つて咲夜さんはフラン達の元へ向かつた

「寝よ…」

「んー…んあ？」

知らな…いや、紅魔館の天井だな多分

てかいつの間にベッドに？

「何かめちやくちやだるい」

長い時間睡眠をとつた後の寝起きぐらいだるい

「やっと起きたのね」

この声は紫さんの声…でもちよつと怒気がある

「えーと、おはようございます？」

「おはようございますじゃないわよ…」

貴方自分がどのくらいの間寝てたかわかる？」

「え？1日くらいですか？」

「1週間よ!!まったくゆっくり待つててつて

言つたのに何で1週間も眠るような事態に

なってるのよ!!」

「えーと、何と言うか興味本意で始まった事が

いつの間にかかなり大きな事態まで膨れ上がって…」

「もう、金髪娘3人を宥めるの大変だったのよ

2人は一向に起きる気配のない貴方を見て泣き出して…

もう1人は大量の人形引き連れて暴れ出そうとして…

あんなに疲れたのは久しぶりよ!!」

「ご、ごめんなさい」

「まったくよ、心配したんだからね?

この事閻魔にも言つといたから、休みの日に

お説教しに来るそうよ良かったわね」

「oh……」

「まあ愚痴はこのくらいにしとくわ…

貴方の幻想郷に住むことに関しては終わったわ、

住居も今の場所で問題ないわ」

「わざわざありがとうございます」

「いいのよ、私が誘ったわけだしね

でもしばらくはここで過ごすのよ？

最低でも1ヶ月安静にしてないといけないくらい

重症だからねわかった？」

「え？でももう何処も折れてないですよ？」

そう言つてベッドから降りて腕を回したり

ジャンプをしたりして確認した

「…信じられない」

「？」

「(人間なら早くても1ヶ月の重症だったはず…)

こんな短期間でここまで早く治るはずない)」

「この“程度”の怪我なら1日休めば治りますよ？」

「…頭が痛いわ、働きすぎたかしら…」

「えつと」

「でも念の為に今日はここで過ごす事」

「は、はいわかりました」

「よしそれでいいわ… それから貴方が起きたから

1週間後に宴会があるから」

「宴会?」

「ええ、詳しい事はまた後で私はこれから

貴方が起きたことを報告するから、それから

明日能力を調べるかもしれないからそのつもりで

「わかりました」

「それじゃあね、絶対安静よ!!」

そう言つて紫さんは隙間の中に入っていった

「(1週間か・・・寝すぎたな)」

ドタドタ

「(「冬華(お兄様)!!」」

「うお!」

金髪三姉妹が勢いよく入ってきた

2人は涙目で、1人は大分焦っているのか

ものすごい形相だ

「(紫さん・・・すみませんでした)」

そう目の前の3人に何て言おうか悩みながらも

心の中で謝罪をした

「まったく、無茶し過ぎよ」

「… 本当にすみませんでした」

今現在アリスさんにお説教されています

ほかの2人はつて？ 泣き疲れて寝てるよ

「興味本意の結果が1週間寝るほどの事態に

陥るなんてどういふことなのよ… 馬鹿なの貴方は？」

ぐうのねも出ないですはい

「あの霧が普通の人には害だつて聞いて

なんと言うかいてもたつてもいられな方と言うか」

「だからつて人間の貴方が能力があるかも分からない

ましては戦う手段が肉弾戦のみつて無謀も無謀よ」

「確かに、チルノも美鈴さんも弾幕は使つてなかつた

から何とかなつたけど使われてたら間違ひなく

負けていた、下手したら死んでたかもしれない」

「結果的にこうして無事だから良かったものの

最悪の事態もあつたかもしれないんだからね？」

「心配かけて悪かった…」

「もう無茶はしないでね」

「… 善処します」

「頼むわよ? (貴方には怪我して欲しくないから)」

大分心配をかけてしまった本当に申し訳ない

「そう言えば、ここの主が貴方が起きたら

話をしたいって言ってたから行ってきなさいよ

この2人は私が見ておくから」

「そうか… わかったよろしく頼む」

「案内の方は私がさせて頂きます」

「!?いつの間に…」

「あ、咲夜さん」

「おはよう冬華、大分長い睡眠だったわね

心配したけど無事で良かったわ」

「いえ、こつちも心配かけたようで」

「大丈夫よちゃんと起きたのだから

「… (何なのかしらこの気持ち)」

「それじゃ行きましょうか」

「ああ、アリス2人をよろしくな」

「え？あ、わかったわ」

「？おう」

「じゃあ案内するわ」チラッ

「？」

「ふふっ」ニッコリ

「!？」

「どうかしたんですか？」

「いえ何でもないわ、行きましょう」

「(何か空気が重い気が?)」

ボタン

「……何かしらこの負けたような気分は」

「そう言えば貴方怪我は大丈夫なの？」

「ああ、あのくらいなら1日で治るからな」

「あのくらいって……かなり骨折してたわよ」

「一体何したらあんな怪我するのよ」

「あれだ、フランと戦闘ごっこして」

「妹様と… 理解が追いつかないわ」

「油断してパンチを正面から受けちまって

右腕のガードごと肋をやられちまったわけだ」

「… 逆によくそれだけで済んだわね」

「まあな（死ぬ時に轢かれたトラック並の威力だった）」

「それにあれが全力じゃなかったほいし

「そろそろお嬢様の部屋に着くわ」

「ああ、何だが緊張するわ」

「大丈夫よ… お嬢様、冬華を連れてきました」コンコンコン

「そう… 入っていいわよ」

「はい… 行くわよ」

「… おう」

「失礼します」

「ええ、ありがとう咲夜… そして初めまして私は

この紅魔館の主レミリア・スカーレットよ」

「はい、よろしくお願いします山神 冬華です」

「緊張しなくていいわ、少しだけ話をしたいだけ

だからね」

「そうですか」

「ええ、咲夜悪いけど少し席を外してくれるかしら？」

「かしこまりました」

「あ、案内ありがとうございます咲夜さん」

「ふふっ、どういたしまして……」

「それでは、失礼します」

「どうやら、フランと咲夜にも気に入られたそうね」

「そうなんですか？」

「ええ、かなりのお人好しと聞いていたけど

なるほどね、貴方からは悪意を感じとれないわね」

「それは、悪意を向けるような出来事がまだ

起きてないだけなのでは？」

「……貴方骨折したんじゃないの？」

「まあ、怪我はしたけどあれは遊んで出来たから

仕方ないかなーと」

「右腕と肋が折れる遊びって何よ…」

「フランと戦闘ごっこです」

「あー、うん納得したわ」

またやるんだつたら鍛えないとな

「まあその事は置いておきましょう…」

「そうですね、それで話って？」

「そうですね、貴方には感謝しなくては行けないことが

あるから呼んだのよ」

「感謝？」

「ええ、咲夜から聞いたわフランとの仲を

戻そうと計らってくれたんでしよう？」

「まあ、そうですね結果的に」

「素直じゃないのね… 本来にありがとう

貴方には感謝してもしたりないわ、

フランには何もしてあげられなかったからね」

「…」

「ほんと姉失格ねフランの為だと思ってた事が
逆に追い詰めてたなんて…」

「そんな事ないですよ」

「いえ私は姉として何もしてあげられなかったもの」

「咲夜さんから聞きましたよ、今回の事は

フランの為に起こしたって」

「でも、それは失敗に終わったもの」

「失敗に終わってもレミリアさんはフランの

為に行動をしたって事に変わりはないでしょ？

それは、姉として妹に何かしてあげようと

したんでしょう？」

「それでも結果は失敗して結局は何もして

あげられなかったもの…」

「でもフランの外出許可はしてくれた」

「それは、貴方の」

「いや、確かにきつかけ作りはしたさ

でもそこからの介入は一切してないぞ」

「でも…」

「それにフランはレミリアさんを恨んだり

してなかったですよ」

「え？」

「フランは自分でも力が危険で精神状態が

不安定だった事を分かっていたと思います

だから自ら他人を避けて地下に閉じこもった、

レミリアさんも外出はダメでも、館内はダメ

とは言っていないですよね？」

「…」

「それにフランはもう力の制御も精神状態の

不安も乗り越えています、だから過去について

悩む必要はないんですよ、今のフランを大切にして

姉として何より家族として接して行けばいいんです」

「… フフツ、まさか私まで救われてしまうとわね」

「はて？なんのことやら」

「フフツそうねこれからはあの子に姉として

してあげないとね… 冬華」

「どうかしました？」

「ありがとう」

「… どういたしまして」

そう言ったレミアアさんの顔は憑き物が取れたように

綺麗な笑みを浮かべていた… 不覚にも見惚れてしまったよ

これがカリススマイルって奴なのか？

「そう言えば冬華は今日一日紅魔館で過ごすのよね？」

「はい、紫さんが念の為と」

「そうじゃあ館の案内をしておこうかしらね」

「咲夜さんがですか？」

「そうね咲夜でもいいけど、私がやろうかしら？」

咲夜は忙しいかもしれないしね？」

「いえお嬢様本日の仕事は終わらせているので

問題はありません」

「あら、そうなのじゃあお願いしようかしら」

「かしこまりました」

「フフツ、よほど気に入られてるのね」

「？」

「……／／／」

「フフツ、じゃあお願いね？ 咲夜」

「は、はい」

「（何かまた変な空気だな）」

「それじゃ案内、と言ってもメイド妖精の部屋とか

客室用の部屋とか回っても仕方ないでしょうし

図書館くらいかしら貴方が行っていないのは」

「図書館があるのか」

「ええ、それにパチュリー様にも貴方を

紹介しておくのもいいしね」

なるほどその人は図書館の管理人的な人なのか

移動中……

「さあ着いたわ」ガチャ

「Wow……」

そこは本、本、本、日本のどの図書館よりも

広くどの図書館よりも沢山の本がある

「（これは、テンション爆上がりだ）」

「パチュリー様少しよろしいでしょうか？」

「どうかしたのかしら咲夜？」

「先日お話した人物を連れてまいりました」

「どうもどうも山神 冬華です」

「そう私はパチュリー・ノーレッジよ、よろしく」

「はい、よろしくお願ひします」

「……」

「？」

「パチュリー様？」

「貴方が本当にフランの攻撃を耐えしのいだの？」

「まあ、不完全ではありますが」

「俄には信じられないわね、貴方からは魔力も妖力も

霊力も感じられない、弾幕も撃てそうにないわ」

「!？」

「まあ、そうですね」

「それに、弾幕を使つてないとはいえ美鈴を

肉弾戦で負かすほどの強さとフランの攻撃を

思い切り受けても完治するほどの再生力……

今までどんな事をしたら普通の人間がそれほど

までの成長を出来るのかしら？」

「ん…… やっぱり死ぬか死なないかのギリギリ

のトレーニングじゃないですかね？」

「……」

「どういう事？」

「何て言えばいいんでしょうか、限界値を

無理矢理突破する見たいな感じですかね？」

リミッター解除見たいな所でしょうか？」

「そう、かなり危険な事をしてたのね」

「まあ目的があつたからですかね」

「そう興味深いけど聞かないでおくわ」

「俺は話しても大丈夫ですけど」

「いえ聞くのは野暮つてもものよ」

「そうですか」

「ええ、私は基本ここに居るから読みたい本とか

あつたら好きに読んでいいわ… それと私の使い魔

も紹介しておく、コアー!!」

「はい、パチュリー様どうかしましたか？」

「ええ、例の人をね」

「ああ、この人がお嬢様達の仲を戻してくれた

人ですね!!初めまして小悪魔です

気軽にコアとお呼びください」ペコペコ

「あ、はい山神 冬華です冬華と読んでくれると

ありがたいです、よろしくお願いします」ペコ

「はい!!よろしくお願いします冬華さん!!」

「ああ、よろしくなコア」

「これで紅魔館は全員になるのかな？」

「冬華はどうするの?ここで本を読むのかしら」

「そうしよつかな、紫さんにも安静にしとけつて
言われたし」

「そう、なら紅茶でも出しましょうか」

パチユリー様もどうですか？」

「そうね、貰おうかしら、コアにもお願い」

「かしこまりました」

そこからは色々あった

本を読んでいたらフランが突撃して来たから

読み聞かせたり、早速魔理沙が本を盗りにきて

パチユリーさんに追いかけられたり、追い疲れたのか

それとも喘息持ちなのかパチユリーさんが倒れたりと

騒がしかった：：ちなみに咲夜さんの紅茶は美味しかった

「ふ〜」

あの後には夕飯を頂いてから入浴をして

今は熱を冷まそうと少し紅魔館の庭を散策している

「涼しいな」

湯冷めは風邪を引きやすくなる見たいな事を

聞いた事があるが、風呂上がりの散歩は

お湯に浸かるのとは別の安らぎ感がある

「おや？冬華さんお目覚めになられてたんですね」

「あ、美鈴さん、すみません伝えるのを忘れてしまつて」

「いえいえお構いなく、今はお散歩中ですか？」

「はい、お風呂上がりの美鈴さんは？」

「少し夜風に」

「そうですね…涼しいですねここの空気は」

「そうですね」

「…何か悩み事でも？」

「少し自信を無くしてしまつて」

「自信…ですか」

「はい、冬華さんに負けてから少し」

「そんな、弾幕なしでこっちはギリギリだったし

何より手加減してたじゃないですか4割くらいしか

全力出してなかったんじゃないですか？」

「4割は盛りすぎですよ、6割くらいです」

「ほら手加減されてる、それに今回勝てたのだから」

美鈴さんの妖力がほとんどない状態になって

動けなくなってしまうからで」

「そこですよ」

「？」

「私の妖力がそこを尽きるほどの長期戦だったのに」

冬華さんは倒れることなくその場に立っていた、

本来妖怪の方が人間よりも体力面で勝っているのに」

「……」

「だから妖怪としての自信を無くしてしまうんですよ」

「……」

「それに肉弾戦だけ見ても冬華さんには計り知れない」

程の伸び代を感じましたし、色々悔しいです」

「俺はそんな大層なもんじゃないですよ、

普通だと思っていた環境が実は異常で

その異常を日々行っていた結果が今の自分ですから

正直才能はある方であるって自分でも思いますよ
でも貴方ほど武術に長けてはいません、

美鈴さんが感じた伸び代は俺が自分の体を扱

きれていないことと、判明してない能力から

くるものだと思います」

「冬華さんは自己評価が低いですかね？」

「違いますよ」

「どうでしょうね」

「…俺だって自信ないですよ、わかるくらいに手加減

されて勝ち、その後にも足も出せないで呆気なく

フランに肉弾戦でボコボコにされましたし」

「妹様と肉弾戦ですか、私も出来れば勘弁して

起きたいです」

「俺は次があるならまたやりますよ」

「!…それはどうして？」

「だって、高い壁は乗り越えるに限るでしょう？」

「!？」

「無謀なら全然問題ない、無理じゃないから」

「凄いですね、私は考えた事ないですよそんな事」

「自分の限界を決めたくないだけですよ…」

「それに美鈴さんだつて鍛錬してたでしょう?」

「…見てたんですか?」

「いや、カマかけました」

「ええ!!酷くないですか、サラツと騙すなんて」

「まあまあ、何だかんだで美鈴さんも負けず嫌い

何ですね」

「まあそうですね（本当は触発されたからやつて

たんですけどね）」

「だったら悩む必要性なんてないですね」

「それもそうですね…そろそろ私は戻りますね」

「ん、わかりました」

「冬華さんはどうします?」

「俺はまだ綺麗な月を見ながら散歩するんで

美鈴さんはお先にどうぞ」

「わかりました、冬華さんも風邪を引かないよう
気おつけてくださいね」

「はい、ありがとうございます」

「いえいえ、それではお休みなさい」

そして美鈴さんは館の中え入っていった

「……………」

……………
悔しい

「あんなに手加減されて」

……………
悔しい

「あんなに一方的にやられて」

……………
悔しい

「…………… 軽く運動するか」

そして一旦紅魔館を出て夜の森に走り出した

「ヤバいちよつと長くなった」

運動かれこれ1時間以上、熱くなりすぎたな

「冬華どこに行ってたの」

「あ、レミリアさん」

「美鈴は散歩って言ってたけど庭はいなかったし」

「あー、少しだけ運動を」

「… 貴方ね、安静にしときなさいって言われ

たんじゃなかったかしら？」

「少しだけですからなまったからだを解す程度です」

「そう…」

「俺はもう入りますね」

「ええ、わかったわ」

「それでは」

「… (さっきまでと雰囲気が大きく変わっていた

それに見てわかるくらいに冬華の水準が上がって

いる) 一体何をしてきたのかしら」

そうレミリアは言葉をこぼした

「興味深いわね…」

面白いものを見つけた子供ののように笑みを

浮かべながら…



能力開花の時間だー

「お兄様、もう行つちやうの？」

「ああ、そういう約束だからな」

「わかった…次はいつ会えるの？」

「んーまだ分からないけど6日後には宴会で

必ず会えるから、最低でも6日としか言えないな」

「そっか…私ちゃんと我慢する」

「ごめんな暇があつたら会いに行くからな」

「大丈夫、お兄様に無理はして欲しくないから

我慢出来る事は我慢するの!!」

「フランは良い子だな（天使だ…）」ナデナデ

「えへへ♪」

「じゃあ宴会当日は俺も一緒に行くからな」

「ほんと!!やったー♪♪」

「（和む、めちやくちや和むぞこれ）」

「んんっ：： そろそろいいかしら？」

（もう少し見ておきたかったけど仕方ないわ）」

「あ、すみません大丈夫ですよ」

「そう、それじゃあ今から能力を調べに

博麗神社まで行くわよ」

博麗：： 博麗：： 聞いた事が：： あ

「博麗ってあの紅白の巫女の」

「あら、会ってたのね」

「はい、ここで自己紹介くらいですけど」

「そういう事ね：： と、話すのはこれくらいにして

そろそろ行くわよ」

「わかりました：： それじゃフランまた来るからな

レミリアさんも咲夜さんもお世話になりました」

「うん!!またねお兄様!!」

「ええ、何時でもいらつしやい歓迎するわ

紅茶くらいならいつでも用意出来るし、ね？咲夜」

「そうですね、美味しい紅茶で」

「それは、次が楽しみだ」

「さ、着いたわ博麗神社に」

「おお、The神社って感じた」

パツと見は普通が当てはまる想像通りの神社だ

だがここには初めて来たはずなのに

「なんか・・・ 凄く落ち着ける場所ですね」

「ふふっ、不思議でしょ？」

「はい、不思議です」

自然の中とは違う安らぎ感がある

「・・・」

「どうかしたのかしら？」

「あ、いや何でもないですよ？ちよつとポーと」

「あら、そうなのそのくらい居心地がいいのね」

「そう、なんだと思います」

そんな話をしていると

「ん、紫とあんたは・・・ 冬華だったかしら？」

いつぞやの紅白巫女の博麗 霊夢が近づいてきた
「ああ冬華であつてるぞ」

「そう」

淡泊な返答だな…

「それで紫何でここに連れてきたの？」

「ん？ああ言つてなかつたわね」

冬華くんの能力があるか見に来たのよ」

… また肝心な事を言つてなかつたのね紫さんは

「は？何言つてんの？能力持ちでしょそいつ」

「ん？」

「え？」

「… いや、まだ能力はあるかどうかもわからんが？」

「いやいやいや、嘘つくんじやないわよ」

「霊夢、彼は嘘を言つてないわよ？」

「ちよつと紫までからかわないでよ、

魔力も妖力も霊力もない人間が妖怪相手に

勝ち越せるわけじゃない」

「冬華くん…… どういう事？」

「あー…… えーとですね」

少年説明中……

「はあ…… 貴方はとことん無茶をするのね

霊夢彼はこの前の異変が起こる3日前に幻想郷に
来たばかりなの、だから能力があつたとしても
それが何の能力か分からないわ」

「じゃあ、魔力・妖力・霊力なしで飛行もできない

そして能力があるか分からない状態で妖怪に

勝ち越して、負傷した状態で弾幕の雨を素手で

さばいたあと身体能力が別次元の吸血鬼の

肉弾戦に耐えた…… むちゃくちゃね」

「いや、手加減されてたし」

「手加減されてても勘弁よそんなの」

「そうね、しかも門番さんに関しては

力を使い切らせたのに対して人一人覆うくらいの

大きさに密度の濃い弾幕を連打で相殺なんて

普通は出来ないわよ?」

「そうなのか…」

「(やっばこいつ変だ)」

霊夢は何か呆れてるし紫さんは苦笑いだ

「まあいいわそれも能力見ればわかるし」

「そうね、じゃあさっそくやりましょうか」

「そうね… ほら」

「ん、御札?」

しかも真つ白で何も書いてない

「その御札には特殊な霊力が流れてるわ、

それを額にあてて力を札の方に流す感覚で

集中させるの、そしたらその御札に文字が

浮かんでくるからその文字があんたの

能力つてわけ、ちなみにあんたに能力が

なかった場合は無って浮かんでくるわ」

「なるほど、面白い原理だな」

「いいからさっさとやっちゃいなさいよ」

「お、おう」

我が道を行くような性格してるな…

御札に流すように力を、おっ？

「文字が浮かんできた」

「何て書いてあるの？」

「ほれっ」

「ん…紫」

「どうかしたの霊夢… あらあら」

「どうなんですか？」

「まずあれね、戦闘向きって感じじゃないわ」

そうなの「ただ」…ん？

「能力が2つあるわ」

「能力が2つって珍しいんですか？」

「いえ、珍しいじゃなくて今までにないのよ」

魔法を使う以外での能力2つもちが」

あれ、ここでも例外か？

「それにどつちも説明が難しそうね」

「どんな能力なんですか？」

「『あらゆることに適応する程度の能力』と

『全てを受け止める程度の能力』よ」

んー、要領を得ないな

「確かに戦闘向きじゃないですね」

「適応つてのがどんなラインまでかによるわね」

確かに程度だから線引きが曖昧だ… そう言えば

「今思い出したんですけど、咲夜さんが

時を止める能力を発動した時俺はその影響を

受けなかつたです」

「…」

「??」

「前言撤回、適応の方は戦闘に應用できるわ」

「お、おう（そもそも、戦闘する気は無いけど）」

「こっちの能力は何となく万能ってわかつたわ

で？こっちの受け止めるって何かしら？」

「んー、流星に分からないな」

「戦闘の応用なら壁役になれそうね」

「受け止めるってそうじゃないと思います…」

「能力つてつげなくていいわよそんなの」

「ふふっ、冗談よ冗談」

「(冗談に聞こえないな(わね))」

「まあ考えて出ないなら仕方ないわ」

「そうね」

結構あっさり終わったな…

「あっそうだ、霊夢宴会の準備はどう？」

「ぼちぼちよ、6日までには全然間に合うし」

なんだったらもつと早めていいくらいよ」

「それは良かったわ、どのくらい来るのかしら」

「そうね、紅魔館組は来るとして文がどうせ」

広めて回ってるだろうからいつも通りじゃないかしら？」

「なるほどね… あっ!!いいこと思いついちゃった」

え、何か心配になってきた

「何よ唐突に」

「人数確保の為に冬華くんを駆り出すのよ」

「はい？」

何で俺？

「ほら、幻想郷にきて日も浅いし色々見て

回りながら見かけた人を片っ端から

招待するってわけよ」

それ俺である必要があるのか？

「文が広めるんだから良くない？」

「まあまあいいじゃない、そっちの方が

楽しそうでしょ？」

「え？え、え？」

「ほらほら、善は急げよ」

「ちよつと・・・はあ、わかりました行きます」

「ふふつ、素直な子は好きよ」

「・・・からかわないでください」

「照れてる照れてるー♪」

あーもう、辞めてくれよー

「もう行きますから!!」 ダツ!!

「行つてらっしやーい」 フリフリ

「あいつ意外と初心なのね…」

「て言うか本当にいいの? 面倒事とかごめんよ」

「大丈夫よ、確証は無いけど彼ならね」

「そう随分肩入れするのね」

「ほら彼さつき見たいな可愛い反応するし」

相手の話もちゃんと聞くからね、

親しみやすそうでしょ?」

「まあ確かにそうね… それより紫あからさまに

冬華をここから離れさせたように見えたけど?」

その話をするんじゃないの?」

「ええ、わかつてたのねお得意の勘かしら?」

「まあそんなところね」

「そう… 私が話す事は彼の受け止める能力について」

「それがなんだって言うわけ?」

「実はこの能力がどういうものなのか

「私はもう知っているのよ」

「は？じゃあ何であいつを離れたわけ」

「彼にはこれ以上話すのも話させるのも

させたくないからね」

「?どういう事よ」

「彼の能力はね・・・彼の生前から来てるのよ」

「やっべ、勢い良く飛び出したはいいけど」

「迷子になっちゃったぜ!!」

「ちくしょう・・・冷静になればよかった」

「とりあえず、進んで何も無かつたら戻ろう

「気ままに行くことも大事だな・・・お!？」

「目線の先には、沢山の向日葵が!!」

「すっご!!どの向日葵も元気に

力強く育ってるし何より広い!!」

「やっぱり花畑はいい、見ていて安らぐし

自然の生命の力強さを感じられるし

「あら、ここに人間が来るなんてね」

ゾワツ!?

「(なんだ!?普通に声をかけられただけの、

たったそれだけの筈なのに)」

「珍しい事もあるのね?」

「(フランが向けてきた圧とは比にならない

くらいに重たい...)」

そしてゆつくりと声の聞こえる方向へ振り向いた

「(これは... 映姫さんや紫さんと同じ)」

隠しきれない強者の風格が滲み出ている

「初めましてかしら? 私は風見幽香よ」

紛れもない格上だ

「よろしく」

そう言って日傘を差しながら幽香さんは、

花のように綺麗でありながらも

絶対強者のような余裕を感じる笑みを浮かべた

宴会に（ご）招待

「よろしく」

「あ、はいよろしくお願いします」

「ええ、それで貴方の名前は」

あつと名前を言い忘れていた

「山神 冬華と言います、すみません名乗り

忘れてしまつて」

「大丈夫よ、私から話しかけたのだし」

：：： なんと言うか紳士的なひとだな

「わざわざここに足を運ぶような人間が

いるなんて興味深くてね」

「そうなんですか？ここに居心地いいですよ

花も見えていて落ち着けますし」

外の世界だったら間違ひなく観光スポットに

なるだろう、見渡す限り広がる向日葵は圧巻で

中々に映えるだろう

「それは私がいるからよ」

「え？もしかして私有地見たいな感じですか？」

「私は花の妖怪、花が好きでここに住んでるの

妖怪がいるとわかってるのにわざわざ来る人間なんて

いないでしょう？」

確かに、人間からしたら妖怪＝怖い物って

認識が定着してるからな

「貴方は知らずに来たのかしら？」

「はい、幻想郷に来たばかりで今は迷子に」

「迷子？何でわざわざ人里から離れて？」

「なんと言うか、紫さんからの司令的な感じですよ」

「貴方あの隙間妖怪と面識あるのね」

「はい、幻想郷に来れたのも紫さんの提案で」

「そう紫がね、珍しい事もあるのね」

「珍しい……ですか」

「ええ、幻想郷に呼び込むのは珍しいわ」

ん？何か含みのある言い方だ

「のはって言うはどういう事ですか？」

「食べる為に連れてくる事は良くあるってことよ」

.....え？

「まじ.....妖怪だから有り得るか」

「貴方意外と冷静なのねもつと驚く事だと思わよ」

「いやまあ驚きはしましたよ？でも紫さんも

つれて来る人間は罪人だと思うので」

「確かに罪人ではあるけど、人間が食料として

連れてこられるのはもつと驚くべき事でしょ？」

「まあそうですね」

「..... 貴方薄情な人間には見えないけど罪人

とはいえ同じ人間がただ食べられる為だけに

無理矢理連れてこられるに不満はないの？」

「ないって事はないですけど、罪を犯した本人は

必ず報いを受ける.....それがルールでその事について

覚悟をしなきゃいけない」

「つまり受けるべき罰って事ね」

「はい」

「そう、ごめんなさいね、言いたくないような

事を言わせてしまつて」

「いえ全然大丈夫ですよ」

「無理しなくていいのよ貴方が悪人でも

悪く言うことをしたくないって言うのは

わかつたからね」

「…」

「面白いわね貴方、花たちもいつも以上に

生き生きと咲いているわ」

「何か弄ばれた気分…」

「あら、ごめんなさい貴方のような純粋な

優しさをもった人間、妖怪何て初めてだから」

…
むず痒いな

「あと反応が良くて」

「紫さんと同じ事言わないでくださいよ」

「あら、可愛くていいと思うわよ」

「…」

「照れてるわね」フッフ

「やめてくださいよ!!」

「こんな弄られやすかったのか俺って

「ふふっ… そう言えば紫の命令ってなんなの

かしら?」

「あっそうでした、実は6日後の宴会の人数

集めに駆り出されました」

「?それなら胡散臭い新聞記者の鴉がいるから

貴方がやる必要はないんじゃないの?」

「紫さん曰く幻想郷をもっと知するためとか

知り合いを作るためとか言っていました」

「それで1人で行かせるなんて、

中々思い切ったことさせたわね」

「幽香さんは宴会に来ますか?」

「そうね、元々行くつもりはなかったけど

わざわざ誘って貰って断るのも悪いわね」

「じゃあ」

「行かせてもらおうわ」

「ありがとうございます!!」

さっそく一人目確保完了だ

「誘うなら早く次に行った方がいいわね、

ここから人里はそこそこ遠いから日が暮れて

しまうわ、帰りは道なりに進めば大丈夫よ」

「わかりました、ではまた宴会で」

「ええ、楽しみにしてるわ」

「はい」

「いい人だったな」

最初こそ怖かったけど話すと紳士的で話しやすかった

「次も頑張るか?..ん?」

見られてる?視線の方向は森の方だ

とりあえず悪意の混じったものでは無い

「(気になる)」

だが興味本位で行ってまた怪我でもしたら

紫さんに怒られるかもしれないし……

「……確認するだけ」

要は怪我をしないように立ち回ればいい

「よし……『剃』シユツ!!」

昨日の夜に習得した剃で視線の場所

まで一瞬で移動した……やれば出来るもんだな

「誰ですか……あれま?」

「キュ!?!」ビクッ!?!

視線の正体は人でも妖怪でもなくキツネの子供だ

でもただのキツネじゃなくて光を反射する綺麗な白い

毛並に薄く金色に輝く瞳、3本生えているモコモコの

尻尾そして何より

「(何だこの可愛い生物は?)」

説明不要なほど愛くるしい見た目をしている

「キュ……キュキュ?」

「な、な、なんだその鳴き声!？」

これはやばい動物好きには毒だ

「キュくキュキュキュ」

「(もう無理死ぬ… じゃない!!) どうしたんだ？」

平常心だ大きな声を出すのはびっくりさせてしまう

からな

「キュキュ」

「ん？俺が気になった？」

「キュ」コクコク

「何で？」

「キュキュくキュキュキュ」

「え？わからないけど気になったって？」

「キュキュ!!」

ぐうぐうかわいい…

「でも一匹だと危ないぞ？」

「キュ… キュキュ…」

「え？見た目が違うから追い出されたのか？」

「キュキュ：」

これは仕方ないとしたか言えない

自分たちと違う物を忌み嫌ってしまうのは

どの生き物同じだから

「住む場所は無いのか？」

「：」コク：

「じゃあ俺んどこ来るか？」

「キュ!？」

「ああいいぞ、一人は寂しいもんな」

「く!? キュー!!」

「よしよし、よろしくな」

まさか同居人が出来てしまった、人ではないが

まあ可愛いから問題なし

「名前はあるのか？」

「キュ：」ブンブン

「そうか：」じゃあ今日からお前はキュウだ」

「キュキュ？」

「ああそれでいいか？」

「キュキュ、キュキュキュ!!」

「よし決定だな」

「キュー!!」

あゝあゝ… かわいい

「ところでキュウ、宴会って知ってるか？」

「キュキュキュ」

「そうそう、そんで博麗神社ってところで宴会を

やるんだがある人の命令で人集めをしてるんだ

この近くに誰か住んでたりしないか？」

「キュ、キュキュ」

「住んではないが近くの川辺で寝てる

妖怪はいるのか…」

どうするべきだ、相手が妖怪だとわかって

るのに行くのは流石に

「キュキュキュ!!」

「よし行くか」

キュウが世話になったなら良い妖怪だろ

ちよろいつて?…フツ動物は正直なのさ

キュウが言った通り川辺の大きな石の上で

気持ちよさそうに寝ている角の生えた妖怪

がいた…

「キュキュキュ!!」

「ぐえ!?!」

キュウが勢い良く走り出して寝ている

妖怪のお腹にDIVEした… コラコラ

「キュウダメだろ寝てる人に飛びかかる何て」

「クソ、誰だつて… ああ、おまえかきつねっ子」

「キュキュ!!」

面倒くさそうに顔を顰めているが俺にはわかる

内心は『まあ悪くない』そう思っているそんな感じがする

「キュキュキュ」

「良かったなキュウ」

「うおっ!! いつの間に、まさか追っ手が……」

て何だ、ただの人間じゃないか

(いや待て、ただの人間が何故態々こんな所に

お世辞にも人間には安全と云い難い場所だ

何より近くには花の大妖怪が住んでる太陽の畑

がある益々普通じゃない)」

「おう俺は山神 冬華、多分普通の人間だ

最近幻想郷に来たばかりで迷子になつてた

時にキュウにあつてそんでキュウに案内

されて今此処にいるつて所だ」

「なるほどな、幻想郷に来たばかりか

それなら納得出来なくもないが、まだ断定は

出来んからな追っ手かもしれない……」

私は鬼人正邪だ」

「そうか正邪か、よろしくな」

「ああ (見極めなければな)」

んー、警戒されてる気がする

「キュキュ」

「ん？指名手配？」

「(な?!きつねっ子何てこと言いやがる)」

「キュ」コクコク

「なるほど…な」

「!? (見極める前に敵対の構図が出来てしまった

だが相手は人間だから私が弱小妖怪とはいえ

人間には負けんさ)」

「それは」

「(来る!?)」

「警戒するのも仕方ないな」ウンウン

「は？(何言ってるんだこいつ?)」

「どうかしたのか？」

「追っ手じゃないのかお前？」

「いや？追っ手じゃないし何で正邪が指名手配

されてるかとか知らないし、俺が危害与えられた

訳でもないしな」

「何だ本当に最近来たばっかなのか」

「それにキュウを助けてくれたんだよな」

「キュキュ!？」

「何となくだ」

「…何の話だ」

「キュウが行き場がない時に助けたんだろ？」

だからキュウが懐いてるんじゃないのか？」

「ふ、勘違いするなよ私はそいつが長生きを

して更に長く迫害を受け惨めに生きていくのを

見ていたいただけ、助けた訳じゃない」

「素直じゃないな」

「キュキュ」

「私は本音を言っているだけだ!!」

集団による迫害を可哀想に思ったとか

そんな事は断じてない」

「そんな事聞いてないけどな…」な」ニヤニヤ

「キュキュ!!」ポワポワ

「な!?!?! ハメやがったな」

「なんの事だろうな? キュウ」ニヤニヤ

「キュキュキュ!!」

「五月蠅いぞ!!」

「うおっ!?!」

なんだなんだ!?! 視界がいきなり逆さまに

「... お前の能力か?」

「ああお前の視界をひっくり返したやった」

「まあ俺には関係ないけどな」

「ああ??!?! な!?!」

多分正邪には正常に動いてるように見えるだろう

「何故...」

「これが逆立ちの成果...」

前の世界で逆立ち生活とか意味不明な

奇行をしていたから割と視界反転しても

能力と合わせて対応出来る

「お前……能力を」

「お前一応持つてるぞ戦闘向きじゃ無いけど」

「……効かないなら意味ないな」

「お、戻った」

「変な奴だなお前」

「天邪鬼に言われるって事は普通だな」

「シンプルに変だ」

「oh……」

ボケまで切られてマジレスされたよ

「いたぞ!!」

「ん?」

「な!?!」

「キュ!?!」

10体程の敵意ダダ漏れの妖怪に囲まれたんだが

「人間もいるぞ、もしかして仲間か?」

「仲間なら食っても問題ないよな?」

おっと、飛び火くらった

「けつ、仲間なんかいねえよ」

「お前のような反逆者の戯言何て

信じられるものか」

「報酬目当てのバカ妖怪の癖に戯言何て

言葉使えるなんて驚きだ」

「オイオイ、煽るなって」

「いいからどっか行けよ、お前らは無関係

だろうが」

「オイオイ今更逃がさねえーぞ人間」

「そう、まあ元から逃げる気なんてないけどな」

「キュキュ!!」

「は？何言って」

「キュキュキュ!!」

「キュウのお友達を見捨てる訳には行かないだろ」

「馬鹿な人間が、殺つちまうぞ!!」

おうおう、一斉に飛びかかってきたな

だがな……

「(ただ頭数だけ揃えても….)」

「なっ!?!」

「意味ない…ぞ!!」

「!?!」

「キュウキュウ!!」

「…つつよ」

「(こいつ、普通じゃないとは思ってたが

強すぎる、能力を使ってるようには見えないし

弾幕を使う素振りも見えない、何より肉弾戦の

レベルが違う素手で弾幕弾くなんてイカれてる)」

「キュウキュウ!!」 キラキラ

「やばいぞこいつ、普通の人間じゃない!?!」

「博麗の巫女でもないのに、肉弾が俺たちより

何倍も強いぞこいつ」

「(こんな無茶苦茶な連携程度の攻撃じゃ

美鈴さんの1割にも届かないな、やっぱり頭数だけか)」

「なあ、もうやるだけ無駄だし」

そもそも俺は争いが好きじゃない」
時間もかけたくないし

「巫山戯るな目の前に報酬があるってのに
何もせず帰る馬鹿なんているかよ」

報酬ねえ…

「はあ…いいから引いてくれないか？」
ドゥ!!?

「ヒッ」

「!？」ビクッ

「キュ…」プルプル

「ね？」

「(こいつはやばい… 下手なことしたら
殺されちまう)… はい」

よし気あたりが上手く言ったな帰ってくれた

「(なんだ、今の威圧感… ブチ切れした
賢者とか大妖怪並の圧力だった)」

「ふう、終わったな… て正邪、キュウどうした

「何で固まってるんだ?」

「あ、いやな、何でもないぞ?」

「(下手な事すると殺られる…)」

「キュキュ?」

「ん?俺?いや強くないぞ」

「いやいや、あれを強くないって言うには

無理があるぞ」

「あの程度だとダメなんだよ、俺弾幕使え

ないから肉弾戦のみなんだそれに現状

空を飛ばないから空中戦だとな」

「さっきのはハツタリか?」

「いや、肉弾戦は正直楽だったし

あの妖怪たちが俺の事なめて油断してたからな」

「だが弾幕を素手で捌いてたろ?」

「あれも相手が連携をしなかったからな」

「無謀な賭けでもしてたのか?」

「まあそんなところだな」

「……馬鹿かお前は」

「何が？」

「私を庇うつて事はお前も反逆者見たいな

もんだぞで」

「ん？あ、そうだな」

「お前そこ考えてなかつたのかよ」

「んー、まあ大丈夫だそんなときはお尋ね者として

よろしくな」

「はあ……お前軽すぎだろ」

「あれだ、ひとりじゃないから何とか

なりそうじゃない？」

「はあ？」

「仲間がいれば乗り越えられる的な？」

「何言つてんだお前、仲間とか受け付けてないぞ

「えー」

「それにお尋ね者の仲間になりたいとか

そんなの信用出来るかよ」

「まあ確かに、でも正邪は優しいだろ？」

「なあキュウお前もそう思うよな？」

「キュキュ!!」コクコク

「はあ、だから」

「それにキュウを助けたのだから」

「自分が今置かれてる状況と同じだったから」

「見捨てられなかったんだろ？」

「…… だったらどうした」

「俺もそんな事があったてさそれが原因で」

「幻想郷に来たんだよ、まあ原因とは言ったが」

「幻想郷に来たのはいいと思ってるけどな」

「お前が？（こんなお人好し野郎が……）」

「ああ…… 俺らつてさ形は違うけど」

「迫害されたつてところは同じなんだよな」

「まあ正邪は悪さをしたからだけだな」

「まあそうかもな」

「お、素直に認めてくれるんだな」

「うるせえ茶化すんじゃねえよ…」

たく、何なんだよお前はお尋ね者の

私なんて無視しとけばいいものを

とんだお人好しだぞ」

「ははは…なあ正邪俺と友達にならないか？」

「あ？何でだよ」

「そんなもんなりたいたいからに決まってるんだろ」

「はあ？…いやなにか言うだけ無駄か」

「おうよろしくな」

「ああ、よろしくしない」

「…そこで天邪鬼すんのかあゝ」

紫さんお尋ね者のお友達が出来ました

「そうだ正邪6日後に博麗神社で宴会あるから

正邪も来るんだぞ」

「…は？巫山戯んなよお前

何でわざわざ自首するみたいな行動しないと

いけないんだよ」

「いいからいいから、俺も紫さんに頼まれて

人数集めしててさ」

「(…) こいつ妖怪の賢者と知り合いなのかよ」

「な？頼むよ正邪と一緒に尋ね者で行くから」

「(…) はあわかつたわかつた、たく今日だけで

どんだけため息吐いてんだか」

「ありがとな正邪!! キュウこれで2人目だ」

「キュキュキュ?」

「2人目?」

「ああ1人目はさつき向日葵が沢山咲いてた

花畑で誘った」

「そうか向日葵が沢山咲いてる畑か(…) は?」

「ん? どうかしたのか正邪」

「(…) その1人目って風見幽香とか言う名前の」

「おお知ってたんだな幽香さんだ」

「(…) ほんと何なんだよ(…) っは!!」

正邪は諦めた様で心の中でまたため息をついた

「じゃあまた人数集め『もう大丈夫よ』紫さん？」

「げ、八雲紫……」

「あら、お尋ね者さんと一緒だったのね」

「紫さんもう大丈夫って俺まだ2人しか

誘えてませんよ？」

「ああ、あれは冗談のつもりで言ったのよ」

「……はい？」

「ふふつ、やつぱり貴方はいいい反応するわね」

ま、また遊ばれたあー!?

「ちよつと紫さん揶揄うのやめてくださいよ!!」

「まあまあ新しく知り合い増えたんだから、ね？」

ぐつ…… 本当の事だからそんなに悪く言えない

「キュキュ？」

「まあ、可愛い狐の子ね、この子は？」

「話題転換が…… まあいいか、この子はキュウって

言います、さつき名前つけたばかりですけど」

「あら、早速相棒に出会えたのね!!」

「これは私のおかげと言ってもいいんじゃないかしら?」

「はあ、調子いいんだから」

「(… 完全に空気になってる… 今なら逃げれるか?)」

「おい、どさくさに紛れて逃げようとするなんて

酷くないか正邪?」

「あらあら、せっかく出来たお友達を置いて

行こうとするなんて良くないわよ正邪?」

「ですよね紫さん」

「ええ、酷いわよね冬華くん」

「キュウキュウキュウ」

「だああ!! うっげええええ!!」

「あら、そんなに怒鳴るなんてどうしたのかしら?」

「何かあったのか正邪?」

「お前らだよお・ま・え・ら!!」

「酷いこと言うわね」

「正邪は俺と友達は嫌だったのか？」

「え？あ、ああ嫌だね」

「嬉しいみたいよ」

「そっか・・・良かった」

「なっ・・・何で私弄る時はそんなに息びったりなんだよ

もしかしてあれか？事前に打ち合わせでもしたのか？」

「いや？」

「そんなの」

「その場のノリと勢いだぞ（よ）」

「（・・・ダメだ、まともに相手にするとこっちが持たん）」

「さて正邪を弄るのはこのくらいにして、

宴会については天狗さんが知らせてくれるから

あと宴会の開催日も早くなつたからその報告」

「え？早くなつたんですか？」

「ええ、3日後に変更よ」

「なら、幽香さんに伝えなきゃ」

「そうなの幽香に・・・貴方幽香に会つたの？」

「え？あ、はい宴会に誘った1人目です」

「そ、そうなの、それで来るのかしら？」

「はい、来ると言っていました」

「そうなの、(まさか幽香に会ったなんて、

それにいつも来ない幽香が初対面の冬華くんの

誘いで来るのも不思議ね…) なら幽香には私から

伝えておくから安心して」

「本当ですか!? ありがとうございます!!」

「大丈夫よこれくらい、じゃあ私はまだやること

があるからもう行くわね」

「わかりました」

「ええ、それじゃあね」

やあ、まさか宴会の日が早くなるなんて

「(一応後で紅魔館にも行っておくか)」

紫さんが行つてると思うけど

「たく、今日はいつも以上に疲れたぜ」

「そうだな、妖怪の襲撃とかな」

「いや、お前のせいだ」

「俺？」

「・・・なんでもない」

「そうだ正邪、泊まる所とかあんのか？」

「あ？ああ、中々良い空き家がある」

「そうかなら良かった」

「無くてもお前の家には行かないぞ？」

「え？何で？外寒くないの？」

「いや、何となくだが後々面倒くさくなりそうな

気がするからな」

「？よく分からないけど、そういう事なら

仕方ないな、じゃあ俺は今日は家に帰るわ」

「ああ、私も時間的に戻る」

「じゃあ次は宴会の日な!!来なかったら

紫さんに強制連行してもらうからな!!」

「ああ、わかったからそれは勘弁」

「絶対だからなあ!!」

「はいはい」

そうして正邪は気だるそうに帰っていった

「じゃあキュウ俺達も行くか」

「キュキュ!!」

明日は紅魔館に行つてから幻想郷探索だな

「よし久しぶりの家だ!!」

「キュウキュウ!!」

「ああ、今日からキュウもあの家に住むんだ…」

あれ? 電気がついてる」

まさか前みたいに魔理沙が物色を?

「キュキュ?」

「ああ、大丈夫だ多分知ってる奴だ」

そう言つて自宅の扉を開けた…そこには

「魔理沙また来たの… ありゃ?」

「あ? お前がなんでここに」

なんと中には正邪が!! 驚きだ

「何でってここ俺の家だし」

「なっ!? どうりで空き家にしては綺麗だと」

「キュキュキュ!!」

「ん? おおそうだな」

「キュウ〜!!」

「おい、今そいつと何話した」

「正邪もここに住むって話だ」

「おい!!! 勝手に・・・おいなんだきつねっ子」

「キュウ・・・」

「そうだよな仲のいい友達と一緒に住みたいよな」

「誰が仲のいい友達だ!!」

「違うのか?」

「キュキュ・・・」

「い、いやその・・・ち、違うね私に友達はいない!!」

「良かったなキュウ友達だっさ」

「キュウ〜／＼」 テレテレ

「おい!! だから違うと・・・クソ面倒くさ」

過ぎるぞこいつら」

「まあ行くあてもないんだろ？俺は別にいいぞ
キュウもその方が嬉しいだろうし」

「：： お前つて本当にお人好しだな、さては騙され
易いタイプだなお前」

「そんな事ないが：： とりあえず居候つてことで
いいな？俺一人だと広く感じるしき、な？」

「いや：： はあもういいその方が楽だからな」
「やったぞキュウこれでもつと楽しくなるぞ」

「キュウ、キュキュツキュ!!」

「私はお前らと遊ぶ気はないからな!!」

そんなこんなで俺の家に2人の同居人が
増えました：： 騒がしくなるぜ

いま、あなたのうしろに…

「よしキュウそろそろ行くか… 正邪は？」

「はあ？いきなりなんだよお前、要件を言え

要件を、どこに行くとか何も聞いてないぞ」

「あー、そう言えば言ってたかったな、

と言つても幻想郷探索だからそんな予定が

決まってるわけじゃないけどな」

「なら、お前らだけで行けよ私はわざわざ

探索する必要ないからな」

「キュウ、キュウキュウ」

「ああ？なんだよ」

「行こうよ… だつてさ」

「いや何でだよ」

「ほらほら正邪ちやくんお友達を悲しませるのは

「良くないから行こうね〜」

「何だよいきなり気持ち悪い... まあいいやる事も

ないから暇つぶしだ」

「良かったなキュウ、ツンデレ正邪と一緒に

来てくれるってよ」

「キュウキュウ!!」

「おい!? だれかツンデレだ誰が!!」

「んで? どこに行く... つつてもわからないか」

「そうなんだよな、キュウは何処か知ってる所はあるか?」

「キュキュ...」 プンブン

「ないか... じゃあ適当に進むか」

「行き当たりばったりかよ...」

「あ、その前に紅魔館に寄っていいか?」

「あん? 何しに行くんだ?」

「紫さんが言ってるかもしれないけど、一応宴会日時が

早くなつた事を伝えるに」

「律儀な奴だな、私はなんでもいい」

「キュウキュウ!!」

「ありがとうな2人とも」

「そう言えば正邪は紅魔館に行ったことあるのか？」

「いや小耳に挟んだくらいだ」

「まあ正邪は行く暇もなかっただろうしな」

「キュキュ」コクコク

「・・・ ありがたいとか思っていないからな？」

「ん？何のことだ？」

「あ、いや何でもない（深読みし過ぎた）」

「キュキュキュ」ニマニマ

「何笑ってんだきつねっ子!!」

「何に照れてんだ？」

「な、何でもねえよ」

「?そうか」

「ああ・・・（来るんじゃなかった）」

「お、見えてきた」

「中々デカイな」

「キュキュ」コクコク

そして、門の前に見えるあのシルエットは...

「美鈴さーん!!」ダッ!!

「うお!?!いきなり走るなって... 速すぎんだろ」

「キュキュキュウ〜!!」ダッ

「おいお前もかよ!!... はあ」

side 美鈴

はあく、宴会まで二日間

「暇です...」

... お昼寝してもいいので「美鈴さーん!!」ヨシ... 後でにしよう

「冬華さん...!?!」

これは...

「おはようg「冬華さん」... どうかしました?」

「... いえ、なんでも無いですよおはようございます」

何でもなくない…

「?はい、おはようございます!!」

冬華さんあなた… 昨日の今日で一体何をしたんですか?

「お元氣そうで良かったです」

「本日は何をしに?」

「はい、宴会の日にち変更の確認をしに来ました」

「その事でしたら紫さんから連絡を頂きました」

「やっぱりそうでしたか」

予想通りだったな

「律儀なんですね」

「念の為にですよ」

「キュ」

「おや?」

あ、そう言えば一人で走り出したんだった

「ごめんなキュウ、正邪は?」

「キュウキュウ」

「怒ってるよな...」

「可愛い狐さんですね」

「はいキュウって言います!! 昨日知り合って今は同居人の1人です」

「そうなんですか、可愛いですね」

「キュキュ!!」

微笑し「おい...」

「お前いきなり走り出し」そしてもうひとりの同居人の鬼人正邪です」

おい!! 遮ってんじゃねえ!!」

「鬼人正邪... お尋ね者さんですか」

「知ってるんですね、有名人だな」

「誇れることじゃねえだろ」

「キュキュキュ」ケタケタ

「... (咲夜さん... 冬華さんの倍率はだいぶ高そうですね)」

「それじゃ来たばかりですけど僕たちはそろそろ行きますね」

「そうですか、残念では有りますが私も門番をしないと咲夜さんに

怒られてしまうので」

「それは... 大変ですね」

「あはは… 次は当日ですかね？」

「はい、丁度いい時間帯に行きますね」

「分かりました、妹様も喜ばれると思います」

「それではまた」

「はい、当日に」

「冬華お前次は絶対に走り出すなよ？」

「キュキュ」

「悪い悪い」

「頼むぞ…」

「そんなに心配… ツ!？」バツ

「ど、どうした(キュ)？」

「… 誰かいる、つけて来ている誰かが」

「… そんな気配微塵も感じないぞ？」

「キュ、キュキュキュ」コクコク

「いや、絶対にいる… 悪い2人は家に戻っててくれ」

「何でだ?」

「お目当ては自分らしい、敵意もないから多分安全だ」

得体の知れない雰囲気はあるがな...

「キュー...」

「大丈夫だちゃんと帰る」

「... 本当にいいんだな？」

「ああ、いざとなったら紅魔館に匿ってもらうさ」

「そうか...」

「心配かけてすまんな」

「... 別にしない」

「そうか、ありがとな... それじゃ後で」

「... 気を付けろよ...」

気を付けろか...

「頑張るか... 出て来ていいよ俺一人だから」

突然現れたかのように出てきたのは、

薄い緑がかかった灰色のセミロングの

鴉羽色の帽子を被った幼さがある女の子…

「(何だこの感覚)」

感情の動きを感じられない

無意識に近いそんな印象がしつくりくる

「ふふつ、お兄さんいつから気づいてたの？」

「ついさつきだよ、ほんの一瞬感じたんだ視線を」

「そんなんだ、凄いねお兄さん」

「そんな事ないよ…それでなんで着いてきてたの？」

「そんな大した理由じゃないよ？面白そうだなーて

思ったから着いてきたの」

危険は無さそうだな

「それからお兄さんの事ペットに出来ないかなって」

… 前言撤回、危険がいっぱいだ

「ペット？なんでペットなのかな？」

「ちよつと可愛いなーて思ったからペットに

したいと思ったの」

「??？」

支離滅裂過ぎる、これが無意識なのか？

「でも、お兄さん嫌そうだし力づくも無理そう」

・・・なら諦めて欲しいな、なんて

「だから、お兄さんを殺して装飾品にしようと思うの」

これは・・・無意識・・・なのか？

「・・・中々クレイジーだね」

「どう？面白そうじゃないかな？」

俺が飾られてるか、確かに見た目はシユールそうだな

「死ぬのは嫌かな・・・」

流石にね？

「そっか、じゃあやーめよ」

あれ？

「あっさり辞めるんだね？」

「だってお兄さんとっても強そうなんだもん」

そんな事ないけど

「それにお兄さん私より速いから逃げられたら

追いつけないし、だから辞める」

よく分からないが助かつ「その代わり」

「私とお散歩しましょ!!」

え? お散歩?

「私は古明地こいし!!お兄さんは?」

「それでここがね!!」

「おお、凄い幻想郷が一望出来るんだな!!」

悪いキュウと正邪：：普通に楽しんでるわ俺

「私ねここ好きなんだ、何でか分からないけど

落ち着いいられるから」

「確かにいい場所だし分かるよ」

絶景と言っても良いほどに幻想郷全体を

見渡せる：：道のりは険しいけど

「お兄さん凄いな」

「ん? どうしたの急に?」

「私にちゃんと着いてきてくれるなんて」

「それはまあお散歩しようって言われたから」

「だからって、ここまで着いてくる人なんて

そうそういないよ?」

「確かに険しい道のりではあるけど、こいしちゃん

を見失わないようにする方が大変だったし何より

楽しいから全然大丈夫だよ?」

「そうなんだ、変わってるんだねお兄さん」

「まあ、確かに変わってるとは思うよ」

「そっか?... お兄さんってさ人間だけど

人間味が薄いよね」

「ちよつと、いきなり酷い事言わないでよこいしちゃん」

「だって、私の知ってる人間はお兄さん見たいに

相手の事中心で動ける人なんていなかったもん」

「別にやりたい事やってるだけだよ、それがたまたま

相手との都合の兼ね合いが取れてるだけの話だよ」

「そうなんだ?... やっぱり変だねお兄さん」

「そんなに変かな?」

「うん... でもとつても優しい」

「うーん、それはどうだろね？」

「お兄さんは分からなくてもいいの、私が優しいって

感じてるからそれでいいの」

まあ、それもそうだな

「また、一緒にお散歩してくれる？」

「そうだな、装飾品にはされたくないしな」

「そうそう、それでいいの・・・それじゃバイバイねお兄さん」

「ああ、バイりつてもう居ない」

最後まで分からないことだらけだったけど

「楽しいかったからまあいいか」

さてキュウと正邪になんて説明しようかな・・・

side こいし

楽しかったな、お兄さんとお散歩

「次はいつ会おうかな？」

私について来ることができて、しつかり私を見てくれた

人間のお兄さん・・・無意識に当然の様に介入してくる人間の

「今から会いに行こう!!」

そうと決まれば「いたぞ!!」ん? 妖怪さんたちが
たくさん集まってる?

「...行ってみよう!!」

覗くだk... あれ? 囲まれてる中心にいるのって

「お兄さん?」

「お前だな」

「?どうかしたんですか、こんな大所帯で」

お兄さんもよくわかってなさそう

「惚けるな!!仲間から全部聞いているからな、

お前がああ逆逆者を庇ったってな!!」

「逆逆者? ああ、正邪か俺の友達だぞ」

「友達? 逆逆者ど? 笑わせんなよ人間あんな奴」 「すいません」 あ?」

「時間が時間なのでもう帰ってもいいですか?」

「は?」

おお、お兄さんも中々クレイジーだ

「それに楽しい一日を友達の悪口で終わらせたく無いんだよね」

「ふざけ「まあまあ、待てよ兄ちゃん」… お頭」

「こつちもよ、あいつを追い回すのに疲れてんだ

そう易々と手がかり逃すわけないだろ？」

あのボス妖怪… 殺る気だ

「(取り巻きの妖怪よりもずば抜けて強そう)」

30対いる取り巻き妖怪たちの敵意よりも

ボス妖怪の殺意の力強さの方が大きい

「だから、兄ちゃんよ…」 バツ!!

すごい速い!!でも…

「(っ)… で? (いないだど!?)」

お兄さんの方が早くて

「お頭さん…」

「っ!?(後ろ!?)速いな、ならこのまま裏拳で仕留める」ブンツ!!

「申し訳ないんですが少し」バシッ

「は? (俺の攻撃を片手で?)」

「寝ていてもらえますか?」

ドゴンツ!!

「(カツコいい!!)」

お兄さんの方が強いもん!!

「ふう... 次やりたい人は？」

「ヒイツ」

「お頭が...」

「い、一撃で」

「無理だ、俺たちじゃ勝てない」

「... 化け物」

「に、逃げるぞ!!」

「え? いや君たちのボス...」

あくあ、見捨てられちゃった

「困ったな... あの」

「いってえ... 他のやつは、いる訳ないか」

「すいません、かなり本気だったから加減が

出来ませんでした」

「は?… ハア、情けない敵に同情されるなんて」

「あの、お仲間は」

「ハッ、見りやわかるだろ? 仲間なんて名ばかり

解釈の一致で出来た集団なだけだ」

「でも貴方はお頭さんでしょ?」

「俺があん中で一番強かっただけだ」

「そうなんですか?」

「兄ちゃん聞いていいか?」

「何ですか?」

「友達だからってなんであのお尋ね者を庇うんだ?」

お前にはメリットなんてないだろ? 俺の知ってる人間どもは

利己的によく深い奴らばかりだ、なのになぜお前は

他者を思いやれる?」

「…理由なんて無いです」

「は?」

「一度関わったら他人事には見えなくて、

確かに正邪は悪さを働いたかも知れないけど

それを集団で責め立てるのは違うと思います」

「…」

「それに、賢者さんたちも正邪に罰を与えた

程度だと思えますよ」

「… だから守る、とんだお人好しだな」

「そんなんじゃないですよ」

「ハア、やめやめ、兄ちゃん強すぎて割に合わん

俺はもうあいつを追っかけん」

「そうですか、ありがとうございます」

「なあ… 俺にもそんなダチ出来ると思うか？」

「はい!! 絶対に出来ます」

「そうか、それは楽しみだ… ティグニ俺の名前だ」

「僕は山神 冬華です」

「女みたいな名前だな… じゃあな」

「はい、また会いましょう」

「さてと、こいしちゃん出ておいで」

「えへへ、やつぱり気づいてたんだね」

「何となくね、こいしちゃんはどうしてここに？」

「お兄さんを探そうとしてたら妖怪が」

沢山集まつてたから見に来たんだよ」

「俺を？なんで？」

「会いたくなっちゃったの」

「そうか、じゃあ仕方ないね」

「そう仕方ないの、ねえお兄さん」

「ん？」

「お兄さんはなんで私を見つけられるの？」

「え、どうしてってこいしちゃんがそこに」

居るから見つけられるんだよ？」

「んー？それだけなの？」

「それだけだよ？」

「あれれ？」

もしかしてお兄さんの無意識を操れてない？

「あ、こいしちゃんも何か能力があつて…」

「例えば意識に関係する感じのとか？」

「え？なんでわかったの!!」

「例えば相手の無意識を操れば」

無意識にそこに誰かいるって言う意識を

外させて認識させないように出来そうだからね、

でもふとした瞬間にそこに例外が発生すると

一気に入目がいく... て事は無意識か」

「じー...」

「えつと？こいしちゃん？」

「決めた!!」

「え、何を？」

「今日から冬華は私のお兄ちゃんね!!」

「... はい？」

「よろしくねお兄ちゃん!!」ダツダツダツ

「え、ちよつと、こいしちゃん!!」

お姉ちゃんにも教えてあげよつと♪

「いきなり過ぎるって!!... マアイツカ」ヨクナイケド

私のお兄ちゃんを♪

side out かいし

おまけ

「お姉ちゃーん!! さとりお姉ちゃーん!!」

「ん? あらこいし今朝出て行ったからまだ帰らないと思ってたけど

今日は早いぶん早いのね?」

「それはね... お姉ちゃんに自慢したくて」

「自慢? 新しいペットでも見つけたの?」

「ふっふっふっ、実はねお兄ちゃんができたの!!」

「そう、それは... ん?」

お兄ちゃん?

「... は?」

「それから博麗神社の宴会にお兄ちゃんに行く

からお姉ちゃんも来てね。(∇^d)!!」

「ちよつとこいし!？」

「じゃあお兄ちゃんのとこ行って来るね〜」

「こいし!!... どういう事なのよ...」

宴会って言ってたわね...

「行く気はなかったのですが」

確かめなくては

おわりん